

今帰仁エイサーの音楽

— 崎山・兼次・今泊の資料化を通して —

こばやし きみえ こばやし ゆきお(1)
小林 公江・小林 幸男

エイサーは、沖縄諸島の伝統的な盆踊である。元来、ムラ人達が浄土宗系の念仏歌に合わせて各戸を踊り廻る盆の行事で、地域により「ヤイサー」「ヨイサー」「七月しちぐワチイェンサー」「七月しちぐワチもーい舞」「七月でいー手」「念仏にんぶちまーい廻り」等とも呼ばれてきたが、今日、エイサーの名で総称される。⁽²⁾現代を代表するといってよい沖縄本島中部一帯のエイサーは、三線伴奏の歌に合わせ、青年達（特に男子）が締太鼓あるいはパーランクー鼓・大太鼓等を打ちながら、華やかな衣装や変化に富む隊形で踊るものである。⁽³⁾こうした太鼓踊のエイサー（以後、太鼓エイサー、という）は沖縄各地の青年層に支持され、エイサーの空白地域や、別形態のエイサーを行ってきた地域へも広がりつつある。⁽⁴⁾

一方、名護市の一部・今帰仁村・本部町・大宜味村・国頭村西岸・東村など北西部一帯の少なくとも45ヶ字あざには、これとはスタイルの異なった、手踊りによる円陣のエイサー（以後、手踊エイサー、という）が伝承されている。⁽⁵⁾このうち大宜味村と国頭村のものは、歌い手の太鼓のみの伴奏による女達のエイサーであり、名護市・今帰仁村・本部町一帯と東村のものは、歌い手の三線伴奏で男女が入り交じって踊るエイサーである。

筆者は、1993年から今帰仁村・本部町でのエイサー調査を行っているが、初年度に取材した今帰仁村今泊・兼次・崎山・仲宗根・玉城のうち、仲宗根と玉城は、共同取材した伊藤真理が卒業論文で既に資料化している。⁽⁶⁾本稿では、今泊・兼次・崎山の3ヶ字のエイサーの現状報告と、楽譜資料・歌詞資料の作成を行ない、大宜味・国頭・本部との比較も交えながら、以下の順に今帰仁エイサーの音楽に関する考察を試みたい。

今帰仁エイサーの概観

1. エイサーの伝承
2. 伝統的なエイサー様式を保持する要因

今泊・兼次・崎山のエイサーの概況

1. 今泊エイサー
2. 兼次エイサー
3. 崎山エイサー

今帰仁エイサーの音楽

1. 曲目と分布
2. 音階とテンポ
3. 3ヶ字にみられる旋律や歌詞の特徴
4. 歌詞と旋律構成
5. 歌い手の歌唱と踊り手の歌唱
6. 踊り手の歌唱と踊りの所作
7. エイサー歌の旋律

おわりに

歌詞資料	今泊・兼次・崎山の各エイサー
楽譜資料	今泊・兼次・崎山の各エイサー 本調子・一二揚ギの比較総譜例

今帰仁エイサーの概観

今帰仁村は、沖縄本島北部西海岸側に突き出た本部半島の北東部に位置する。三山時代には沖縄本島北部から南奄美にまで勢力を広げた北山の城（今帰仁城）があり、これを中心に集落が作られていった。今帰仁村の前身である今帰仁間切は、現在の今帰仁村と本部町を含んでいたが、1666年に今帰仁間切と伊野波間切（1667年、本部間切と改称）に分割された。1674年には一部が羽地間切の管轄となっている。また天底（現今帰仁村天底）は、1719年に本部間切から今帰仁間切へと移管した〔今帰仁村教委 1993：9-10〕〔本部町 1995：33-36〕。このように、地理的にも歴史的にも今帰仁村と本部町とは深い関わりがある。

今帰仁村の主産業は農業で、花卉や西瓜の栽培を中心に甘藷、マンゴー、野菜などを作っている〔今帰仁村 1992：24〕。集落は現在19ヶ字があり、凡そ西から

今泊・兼次・諸志・与那嶺・仲尾次・崎山・平敷・謝名・越地・仲宗根・玉城・呉我山・天底・勢理客・湧川・渡喜仁・上運天・運天（以上、沖縄本島）、古宇利（古宇利島）と並ぶ。村役場はかつて運天にあったが、1926年から仲宗根に移っている。人口は1950年に15,398、1965年には14,478であったが、1996年5月末現在9,668名と、過疎化が進んでいる。

1. エイサーの伝承

今帰仁村の芸能では、各字の豊年踊⁽⁷⁾とエイサー、および湧川の路次楽^{るじがく}が代表的なものである。このうち豊年踊は、経済的な負担が大きいため、3年乃至5年毎に開催という字が多い。これに対してエイサーは、毎年旧盆の時期に行われる。

今帰仁村のエイサーは、少なくとも戦前は村内のどの字でも行われていた。呼称は、「七月舞」（しちぐわちもーい、あるいは、ひちぐわちもーい）「七月エイサー」などと言うが、中部スタイルの太鼓エイサーに対して「しまエイサー」と呼ぶこともある。1993年の調査時点では、呉我山（数年前から）・古宇利（戦後）が途絶しており、天底・湧川の2ヶ字が中部スタイルの太鼓エイサーに換わっている。（追記：古宇利はその後1996年に復活した。）

沖縄各地のエイサーは、女エイサーを除き、青年会によって担われる。しかし、今帰仁村では過疎化で青年会が維持できない地域も多く、エイサーも中止に追い込まれるか、あるいは他の階層が伝承せざるを得ない状況が見られる。前者の例は玉城^{たまし}や今泊であるが、ともに1993年の青年会再結成に伴い、エイサーも復活している。後者の例は諸志や崎山で、崎山では青年が一人もいなくなった現在、青年会後の男子の年齢別組織である消防が行事を引き継いでいる。

今帰仁エイサーは本来、青年が旧盆の送り日などに各戸を巡り、家の庭やあじまあ（辻）で踊るものであるが、現在では上記のような状況もあり、字の広場に櫓を組んで区民を集めて行うことが目立つようになった。今泊・兼次・与那嶺・仲宗根・玉城などは現在も旧暦7月15日や16日に家廻りをし、夜も広場で字の人々を交えてエイサーを行うが、諸志や崎山・越地などは、16日に各ムラの公園・広場でのみ踊る。また、日程も現在では必ずしも一定せず、郷友会や字民の都合で調整することがある。

本部町や国頭村では、別種の芸能である臼太鼓の後に余興としてエイサーを行

う地域もあるが、⁽⁸⁾今帰仁村は臼太鼓がないため、盆以外に行く機会はない。⁽⁹⁾また、玉城エイサーはかつて定期的に施設を慰問したというが、今は行わない。

曲数や歌詞数は、近年減少しており、各字とも、減らした中での確実な伝承を図っているように見える。特に、歌詞は各曲とも精々2首止まりで、1首の上句のみのものも多い。そのため、全曲の所用時間は以前の半分以下になっているという。

玉城在の新城安昌氏の話によれば、玉城エイサーの歌詞はかつて120あった。それが戦時体制の1937（昭和12）年、法務局の検閲で戦時に合致しない歌詞や男女関係の歌詞の削除を命じられ、72～75に減少した。更に戦後も新しい道德観に基づき、性愛や封建的な教訓に関する歌詞が徐々に削られていったという。仲宗根の金城善吉氏によれば、仲宗根エイサーでは、歌詞が卑猥であったり差別的であるという理由で曲そのものを割愛する場合もあった、とのことである。[伊藤 1993：29-32]

家廻りは、故老の話では、各字ともほぼ「此まから来んでいいみしえーたん」（ここから来いとおっしゃいました [ので、屋敷内に失礼します] の意）等と歌って開始し、家の規模や御祝儀の予想額によって曲を一部省略する場合もあったが、一渡り踊っては次の家に移ったという。

現在は「此まから来んでい……」は歌わないが、家廻りの件数が減っているためか、1ヶ所ずつ全曲をほぼ一通り踊る。また、夜にムラの広場で行う場合には、合間に老人会の余興の踊りや、子どもたちの踊り、民謡、カラオケなどを挟みながら、一晩に数回、全曲を繰り返す。広場では、青年だけで踊る機会もあるが、ムラじゅうの人々がこぞって踊る場面もある。字によっては近年、広場で踊るには一定の時間が確保されないと寂しいと言うことで、以前廃した曲を復活させてレパートリィに加え直す所も現れている。

曲は、本調子と一二揚ギ⁽¹⁰⁾で各10曲程度をメドレーで演奏して、一渡りとなる。一二揚ギで終わるので、エイサー後のカチャーシーには、本調子の《唐船どーい》ではなく《加那ヨー》が通常、演奏される。テンポは、全曲を通じて基本的に一定で、♩=110-140前後と、比較的ゆったりした中部の太鼓エイサー（地域により♩=50-100程度）に比べ、相当に早い。⁽¹¹⁾したがって、現行のように各曲を2節程度に短縮した場合、約20の全曲を通して概ね15分前後で終わる。歌は三線

の弾き＝歌い手がリードし、踊り手が囃しを掛ける。調子づけに、櫓太鼓や締太鼓も一台加わることが多い。

三線の弾き＝歌い手（以後、歌い手という）は、「^{ぢうてー}地謡」「^{ぢかた}地方」とか「三線弾ちやー」と呼ばれる。歌い手は青年に限らず、三線上手であればよい。しかし、字独特の節回しをメドレーで早弾きし続ける必要があるため、中部の太鼓エイサーに比べ、三線には相当高度なテクニックが要求される。したがって、現在の青年層が弾くには、シマのエイサーはなかなか荷が重い。古典や一般民謡の歌い手とは異なり各ムラとも人材確保が難しく、歌い手の老齢化で生演奏ができないことも多い。このため兼次や諸志などのように、当日もテープを使わざるを得ない字も見られる。

しかし、崎山や越地のように予算を計上して歌い手を養成し、上の世代の録音テープを繰り返し聴き取ることで生演奏にもどしたり、仲宗根のように先輩の歌い手が工工四を創りあげ（1995年）青年への伝承を計るなど、さまざまな努力もなされている。特にこの数年、沖縄の郷土意識が再び強まる方向にあり、沈滞気味の青年会活動にも新たな意欲が沸きつつあるように見える。

今帰仁エイサーにおいて、踊り手が踊りながら掛ける囃しや歌詞は、重要な部分である。これら囃しの詞章や歌詞は、歌詞内容全体と関わるが多いため、歌の節（せつ）によって変化することが多い。また、踊りの所作も囃し詞に対応して当て振りになる場合がある。したがって、歌詞を十分に覚えていなかったり、詞の意味を理解していない場合には、踊り手はうまく囃しを掛けられず、踊ることもできないということになる。こうしたことから、玉城のように一旦伝承の中断した字では、先輩格の歌い手が全曲演奏できたとしても、一挙に曲目を元に戻すことができないという状況も生じる。この点でも、今帰仁エイサーの伝承には、掛声中心の囃しで構成される中部の太鼓エイサー（とりわけ与勝地域）とは異なった困難さがあるといえよう。このため、例えば本部町渡久地のように、印刷物とカセットを各人に配って、車を運転しながらでも練習ができるようにという配慮をしている地域もある。

中部のエイサーでは、扮装も各ムラの持ち味を示すもので、様々な工夫がこらされるが、今帰仁エイサーに殆ど特別な服装はない。今泊では踊り手が全員着物を着るが、他の字ではせいぜい法被を服の上から羽織ったり、海洋博覧会当時の

アロハシャツを着るなど、ほぼ日常の服装で踊る。

踊りは、各字とも採り物を持つ曲は一切なく、総て手踊りである。⁽¹²⁾この点でも、扇や四ツ竹などを交えた名護市の手踊エイサー（例えば旧名護町世富慶）や大宜味村（特に饒波以南）の女エイサーに比べ、素朴な印象を与える。

所作は、本部町各地の伝統的エイサーと同様、両手をあげてカチャーシー風に手をこねながら、円周上をぐるぐる回るのが基本といえる。一曲の中で円周の進行方向を幾度か変えるのも、本部町と同様の基本的特徴である。

今帰仁エイサーと本部エイサーの所作には類似点が多いが、違いの第一は当て振りや舞台風の所作の有無にあるとあってよい。本部にはない（今帰仁村に隣接する字具志堅のみ例外だが）囃し詞に密着した手や体の動きを、今帰仁エイサーには垣間見ることができる。但し、当て振りや舞台風の所作の混入度には今帰仁村内でも地域的な差異があり、筆者の数年間の大まかな観察では、最も都会化している仲宗根周辺の仲宗根・玉城・越地にその要素が強い。第二に、単に手拍子をし続けながら円周を廻るという本部エイサー（特に旧本部町地域）の基本所作が、今帰仁には殆どない。本部の手拍子部分は、今帰仁では旋回を含んだカチャーシー風な手振りの円周運動になっているのである。更に第三に、兼次や諸志・今泊に見るような（戦後導入されたものであるが）縦列で踊る曲の挿入も、本部町には全くない。本部に対する今帰仁エイサーの何れの特徴も、^{せうどうい}雑踊などの舞台芸的な「観せ、観られる」ことをより意識した要素が、名護市ほどではないにせよ取り込まれてきた結果といえる。

2. 伝統的なエイサー様式を保持する要因

冒頭にも述べたように、今日、一般的に沖縄諸島でエイサーといえば、本島中部の男の太鼓踊を主体とした様式を指す。近年この他に、沖縄市を核として村落単位を越えた男女同権的な太鼓踊である「琉球國祭太鼓」の運動も成長してきたが、その踊りの基本的な様式も中部の太鼓踊に基づいている。これらは、例年地元の新スや番組、観光のポスターやガイドでも盛んに採り上げられ、また「全島エイサー祭」や「青年エイサー祭」等の大きなイベントにも出場する機会が多い。勇壮な太鼓は派手な衣装と相まって、特に男性の踊り手にとり、エイサーは男らしさを誇示する見せ場でもある。全島の幼・保・小学校の運動会などで広

がっている「子供エイサー」も、中部のエイサーを基調に振り付けられており、居住地域に拘わらず、子どもたちにとっても中部の様式がエイサーの規範となりつつある。

一方、北部や本部半島の手踊エイサーは、観せる芸能という形に展開していないので、まずマスコミで採り上げられることもなく、外からの客も殆ど見えず、沖縄の人でさえ存在自体を知らない場合が多い。こうした中で、北部の青年たちが自分たちの伝統的なエイサーを捨て、中部のエイサーに切り替えたがる現象は、決して不自然ではないと言えよう。事実、例えば今泊などでも、今日のように中部エイサーがもてはやされていない戦後間もなく、既に中部の太鼓エイサーに切り替えようという話題が出たという。

こうした欲求が長い間あるにも拘わらず、現在もなお多くのムラで伝統的なエイサー様式を保持している力は、何なのであろうか。これに関しては、各ムラでの話にはほぼ共通項が見出される。以下の3点がそれであるが、過疎の力と手踊エイサー自体の性格の二つに集約することもできる。

① 経済的問題……太鼓や衣装や指導者招聘には、相当の資金がかかる。

② 踊り手の人数の問題……マスゲームの要素の強い太鼓エイサーは、数十人以上の規模でないと、なかなか様にならない。

事実、筆者の調査でも中部で、青年の参加者が100人近くに達しなかったという理由で、エイサーが中断したムラの例がある。

次の③も大きな要因となっている。この点に関しては前述の伊藤も強調している。[伊藤 1993：48-51]

③ ムラ全体の問題……青年がエイサーを替えてしまうと、ムラの壮年～老年や帰省した人々が、一緒になって踊ることができない。

青年が家廻りをするのも重要に違いないが、青年ばかりでなくムラの老若男女がこぞって踊るのも、本部半島地域の多くのエイサーでは大切な部分である。また、今でもあじまゑ等での青年の踊りの輪に、通りがかりの年長のムラ人や近所の人々が即興的に加わるのを時折見ることがあるが、これも衣装や太鼓を必要としない手踊エイサー故に可能なことである。字によっては昭和初めの頃でもムラの広場で皆で徹夜で踊ったというから、そもそもこの地域のエイサーは、奄美の八月踊と同様、昔から広場ではムラじゅうの人が踊るものであった可能性が強い。

しかも過疎の中では、青年会の力は壮年会・婦人会・老人会や郷友会と比べ、小さくならざるを得ない。

したがって、太鼓エイサーに移行したいという青年会の要望は、先ずもって老人会からの批判に遭う。故老達は、観せるエイサーに価値を見出していない。平等に参加できてこそエイサーでありムラの祭である、と主張するのである。字もそれを支持する。見物し、あるいは参加する壮年～老年層に対して、親孝行・お年寄り孝行の意味で青年が踊る、という意義付けもあるようである。

何れにせよ、この地域ではエイサーが、青年のというより、ムラ全体のものという意識が強くあり、それが伝統を繋いでいるということができる。

今泊・兼次・崎山のエイサーの概況

以下、今泊・兼次・崎山のエイサーの概況を述べる。

1. 今泊（いまとまり、方音えーどめー [親泊]）

今泊は今帰仁村の一番西側に位置し、本部町（旧上本部村）具志堅と境を接する。北山王の居城であった今帰仁城を有する字で、1903（明治36）年に字今帰仁と親泊の合併によってできた。1906（明治39）年に一旦分離するが、1972（昭和47）年に再合併して現在に至る。

今泊エイサーは「七月エイサー」「七月舞」と呼ばれるが、後者の呼称は故老のみ用いる。戦前、今泊の青年団はムラで銭湯も経営しており、これが大きな収入源となって活発な活動を行っていたというが（徴用で青年減となり、戦時中に消滅）、戦前のエイサーについては、よく知った故老に未だ筆者は会えず、確認できないことが多い。宮里正男・玉城毅氏によれば、戦時中に中断し、戦後は1948（昭和23）年頃から再開したが、その後再び途絶し、1993年に青年団の再建に伴ってエイサーも復活したという。

1994年の青年会会員は25名で、今帰仁村ではかなり数の多い方である。

家廻りは、現在も行われている。戦後暫く迄は、旧暦7月15日に御送り（ううくい）を済ませてから夜を明かして廻り、16日は午後から廻っていた。この時代

には、今のように広場で櫓を組むことはなく、櫓は1974（昭和49）年から始まったという。現在は、15日の夜に今泊公民館前の櫓の周りで行い、16日の午後に家廻りをしてから、また櫓の周りで踊る。

かつての家廻りでは順序は特に決まっておらず、おーれー御殿・ぬる殿内の後に、事前に青年団の幹部が予約を受けていたところを廻った。新築の家や子供の産まれた家は大抵廻ったし、病院でも踊ったという。また、4～5軒分をまとめて、あじまあでやることもあった。一方、忌みのある家ではその年はしないことになっていたという。現在もほぼ同じような形態だが、トラックで手早く移動できるということもあって、山上の今帰仁城址門前にも出向いている。家廻りで貰うものは金銭やお酒で、これらは青年団の資金となっている。

現行の曲目は、以下の20曲である。所要時間は、15,6分。なお、エイサーでは一般に個々の曲に特別な呼称がない。したがって本論では、特徴的な歌い出しの語や囃子ことばで曲名を記し、《念仏》《二合小》《前田節》のようにポピュラーな曲はその通称を記した。

本調子	1. 念仏	2. ^{にんごうぐわー} 二合小	3. ^{めんだー} 前田節	4. ^{なちじんぐしく} 今帰仁ぬ城
	5. ^{いにし} 稲摺り	6. ^{くぬぼぎー} 九年母ん木	7. ^{ヌーユウビ} 何ガ夕辺	8. テンヨー
一二揚ギ	9. イルサスラ	10. ^{たんちやめー} 谷茶前	11. ^{カナー} 加那ヨー	
	12. デンスナー	13. 汀間当	14. カマヤシナ	
	15. だんこ	16. ^{くんぢゃんさち} 国頭岬から（旋律は所謂『海ぬちん法螺』）		
	17. ^{なかじょー} 仲門 へい（所謂 ^{なかざひー} 《仲座兄》）	18. ^{かんだばー} 蔓葉		
	19. ^{あかやま} 赤山	20. ^{うにげー} 御願節（旋律は所謂 ^{みるく} 《弥勒節》）		

かつては《スリ東》《海やからー》もあったという。

踊りは、今帰仁村の他の多くの字のエイサーが曲の1拍毎に1ステップ（重心移動）するのに対し、2拍毎であるのが特徴で、そのためゆっくりに見える。所作には、カチャーシー的な踊りに方向の変化が加わったものと、片足を前に出しながら手拍子を打つものがあるが、他の字に比較的多く見られる、片腕を前に出して歩く動きは少ない。また、《前田節》《稲摺り》《何ガ夕辺》では当て振りも加わる。

円陣は二重円で、内側と外側で逆に廻り、互いに顔をすれ違わせながら踊る。但し、終曲の20《御願節》だけは横長の縦列になり、全員がエイサーを依頼した家庭に向かって演じる。同様の演出は字諸志にも見られるが、戦後になって加えられたレパートリィとのことである。

男の踊り手は鉢巻に襷掛けの浴衣、女の踊り手は手拭いを首に掛け浴衣、歌い手は普段着である。練習はかなりよく行われ、深夜まで練習するが、主に録音テープを使う。行事の当日は大太鼓打ちと歌い手が演奏する。

2. 兼次（かねし 方音はに一し）

今泊の東隣りに位置する字で、元の集落は現在より山側にあった。古くは兼城と記されていたこともあり、17世紀中庸から記録に現れる古い字である。

地元の玉城鎮夫氏によれば、エイサーは兼次では、「七月舞」あるいは「七月エイサー」と呼ばれた。戦時で中断し、1950（昭和25）年頃から復活している。家廻りは昔と同様、現在も行う。戦前は2晩徹夜で各家を廻っていたが、時間がない場合や庭が狭いなどの時には数軒まとめて、あじまゝなどでやっていたという。ここでも今泊同様、忌みの家では踊らない。現在では旧暦7月16日に、エイサー衆がラジカセや拡声器・飲料水などを積み込んだ軽トラックとともに移動しながら、字のあじまゝでエイサーを行い、夜には公民館の広場でも踊る。かつて3人いた歌い手が1人に減ったため、歌を録音テープに吹き込み、実際の行事もこのテープを使用している。

家廻りで貰うものは大体金銭で、青年会の資金となる。戦前は酒や金銭をもらっていたが、その時代は普通は10銭、多いところでは50銭、1円という家もあったという。当時はこの収入で手拭いなどを買い、残りは青年会の経費に充てた。また、餅や肉なども振る舞われ、女性には善哉が出されたという。

現行の曲目は以下の16曲である。所要時間は、約14分。

- | | | | |
|-----|---|--|--------|
| 本調子 | 1. 念仏 | 2. テンヨー | 3. 稲摺り |
| | 4. 祝い節 | 5. 弥勒世 <small>みるくゆー</small> （旋律は所謂《真山節》） | |
| | 6. 新安里屋 <small>あさどやー</small> ゆんた | 7. スリ東 <small>あがり</small> | |
| | 8. 兼次板干瀬 <small>かにしいたびし</small> （旋律は《あっちゃ <small>めーぐワ-</small> 舞小》） | 9. 九年母ん木 | |

- 一二揚ギ 10. 谷茶前 11. 蔓葉 12. ましゅんく
 13. あぬ杜^{むい} 14. 里^{さと}が (旋律は所謂《弥勒節》)
 15. サヨサー (旋律は所謂《世界報節》) 16. 十七八節

踊りは、曲の1拍毎に1ステップ(重心移動)する。所作の基本パタンは今泊と同様だが、《稻摺り》《祝い節》《弥勒世》で縦列になり、互いに向き合って交錯したりしながら踊るのが、隣接する諸志を除く他の本部半島の伝統的エイサーには見られない独自のスタイルである。この形は、中部エイサーの基本形であるから、手踊りのまま中部スタイルを採り入れた結果とも考えられよう。このうち《稻摺り》の所作のパタン自体は他の円陣踊と同様だが、《祝い節》は舞台芸的な所作で、《弥勒世》では手拭いを広げながら踊る。一方、円陣踊りの《新安里屋ゆんた》は戦後に加わった曲ではあるが、所作の基本パタンは今帰仁の伝統的な型から逸脱していない。終わり近くに《サヨサー》で再び縦列になるが、今度は向き合わずに、今泊・諸志の《御願節》同様、全員がエイサーを依頼した家庭に向かって演じる。当て振りは《稻摺り》に見られる。

地元の玉城鎮夫氏によれば、以前はこの他に、《二合小》《久高万寿主》《今帰仁節》《海やかからー》《前田節》《ヌヌ萬歳(伊舎堂ん前)》《健堅辺名地^{きんきんひなぢ}》《唐船どーい》《越来節》《鳩間節》《だんじゅ嘉例吉》《仲座兄》《イルサスナ》《カマヤシナ》《海ぬちん法螺》《だんく節》《テンスナー》《汗水節》《県道節》《汀間当》《加那ヨー》《赤山》などが行われた。このうち、新民謡《汗水節》は1920(昭和5)年頃に踊っていたといい、《鳩間節》は3～4年間、他に《ジントーヨー》も踊った年があるという。氏によれば、二列の隊形になる《サヨサー》は、戦後に今泊から習ったらしい。常に新しい曲が入り、戦後も積極的なレパートリーの改編があったことが判る。

衣装は、首に手拭いをかけ(《弥勒世》で用いる)、鉢巻に法被を羽織る程度で、着物などは着ない。練習は、昔は1ヶ月ほど前から音が字内の家々に聞こえない村外れで行い、練習後の遊びが大層楽しみであったという。現在は、数日前から公民館の庭で練習する。

3. 崎山（さきやま、方音しちやま）

今帰仁村の中央よりやや西に位置する字で、もとの集落は現集落から遠く離れた山側にあり、現集落近くのシチャマへの移動の後、現集落の位置まで移動している。兼次同様、17世紀中庸から記録に現れる古い字である。

崎山エイサーは「七月エイサー」「七月舞」（後者は故老のみ）と呼ばれるが、現在は「しまエイサー」と言う人もいる。地元の上間仁正氏によれば、戦時中の中断期間ははっきりしないが、1950（昭和25）年頃にエイサーは再開された。数年前（1994年時点で）までは家廻りもしており、7月16日の午後から廻り始め、翌朝までかかることもあったという。何十年か前には、朝から夜までかかっていたらしい。家を廻る順は決まっていなかったが、区長の家に行き、新築の家、子供が産まれた家などでやっていた。家廻りで得るのは大抵金銭で、後に宴会などに使ったという。

また、『崎山誌』によれば、昭和の初め頃までは16日の御送りが終わって晩になると、ムラの中央のサーター毛に家族一人残らずエイサー見物に集まって、徹夜したという。[崎山誌 1989：119]

近年、崎山では極端な青年層の不足のため青年会がなくなり、エイサーは消防が維持している。家廻りをしない現在は、あさぎま一横の運動場に櫓を作り、ここで旧暦7月16日の夜にエイサーを行う（「十六遊び」という）。1994年の実況では、20時前から23時丁度まで行われ、エイサーの合間には子どもの踊り、老人会の踊り、民謡、本土風の盆踊などが披露され、仕掛け花火も上がった。

現行の曲目は以下の23曲である。所要時間は、約13分。

- | | | | | |
|-----|---|---|--|-----------|
| 本調子 | 1. 念仏 | 2. 七月念仏（旋律は《健堅辺名地》 | | |
| | 3. 何ガ夕辺 | 4. 二合小 | 5. テンヨー | |
| | 6. 伊舎堂 <small>いさどう</small> ん前 <small>めー</small> | 7. 稻摺り | 8. 夜 <small>ゆー</small> や明きたい | |
| | 9. スリ東 | 10. 今帰仁ぬ城 | 11. 海やからー | |
| | 12. 蛙越 <small>い</small> る（旋律は所謂《唐船どーい》） | | | |
| | 一二揚ギ | 13. 谷茶前 | 14. イルサスネ | 15. カマヤシナ |
| | | 16. ヨー加那ヨー | 17. 旅 <small>やど</small> や浜 <small>い</small> 宿 <small>い</small> | |
| | | 18. 名護 <small>なぐ</small> から（旋律は所謂《帽子くまー》） | | |

19. だんこ 20. 蔓葉 21. デンスナー
22. 夜起キシタクリ 23. 加那ヨー

この他、『崎山誌』には、『久高万寿主』《目出度い節》《時遅くなる迄》（所謂《刻み節》か……筆者）、《海ぬちん法螺》《仲座兄》の5曲7首の歌詞が記載されている。[崎山誌 1989：120-124]

踊りは、曲の1拍毎に1ステップ（重心移動）する。所作の基本パターンは他の字と同様だが、全体に歩行部分が多く、シンプルな印象を与える。当て振りは、『稲摺り』《夜や明きたい》に見られる。

前出の上間氏は1955（昭和30）年頃からエイサーに参加して以来、十数年間歌い手（地謡）を勤めていたが、氏が歌い手をやめた2～3年後には歌をテープに吹き込んでエイサーをするようになったという。この状態は長く続き、筆者の1993年の調査時にはまだテープを用いていたが、1993～1994年にかけて上間氏の助力で歌い手の養成が行われ、1994年の盆には2人の歌い手による三線と歌が披露された。なお、この時の歌の旋律は、上間氏のものとは異なる部分が見られるため、もう少し定着してから比較するのがよいと考え、本稿の楽譜資料には加えていない。⁽¹³⁾

衣装は、鉢巻と平服に法被を羽織る。練習は以前は旧6月25日に開始し、7月12～13日までしたというが、今は直前の数日しかしていない。

今帰仁エイサーの音楽

1. 曲目と分布

ここでは3字のレパートリィについて、国頭・大宜味村の女エイサー調査資料と現時点での今帰仁村や本部町の資料を交えながら述べる。

3字のレパートリィと、他の今帰仁村・本部町の手踊エイサー、⁽¹⁴⁾ 及び国頭・大宜味の女エイサーのレパートリィ [小林幸 1986：別表2] とを比較して記したのが、〈表I〉である。

かつての改廃が現時点ではよく判らないが、今泊のレパートリィは、戦後に導入された終曲《御願節》を除き、他地域にもみられるエイサー曲である。この《御

表Ⅰ エイサー同系旋律比較表

○ .. 現在も伝承される曲
 ◎ .. 3ヶ所以上での伝承が確認される曲
 ● .. 現在では途絶した曲

	今泊	兼次	崎山	今仁	本部	虹イサ
本調子	前口上	○	●		◎	○
	念仏	○	○	○	◎	◎
	二合小	○	●	○	◎	◎
	稲摺り節	○	○	○	◎	◎
	テンヨー	○	○	○	◎	◎
	スリ東	●	○	○	◎	◎
	今帰仁ぬ城	○	●	○	◎	◎
	海やからー	●	●	○	◎	◎
	九年母ん木	○	○		●	
	何ガ夕辺	○		○	○	◎
	伊舎堂ん前		●	○	○	◎
	健堅辺名地		●	○	●	○
	畦越いる		●	○	◎	○
	前田節	○	●		◎	○
	久高万寿主		●	●	◎	◎
	祝い節		○			
	弥勒世		○		○	
	新安里屋ゆんた		○		●	
	あっちゃ舞小		○		○	○
	越来		●		○	○
	鳩間節		●			
	だんじゅ嘉例吉		●		○	○
	夜や明きたい			○	○	
	目出度い節			●	○	○
時遅くなる迄			●	○		
一 二揚ギ	谷茶前	○	○	○	◎	◎
	蔓葉	○	○	○	◎	○
	イルサスナ	○	●	○	○	○
	加那ヨー	○	●	○	○	◎
	カマヤシナ	○	●	○	◎	○
	だんこ	○	●	○	◎	◎
	デンスナー	○	●	○	◎	○
	仲座兄	○	●	●	◎	○
	海ぬちん法螺	○	●	●	◎	○
	弥勒節	○	○		○	○
	赤山	○	●		◎	○
	汀間当	○	●		○	◎
	あぬ杜		○			
	サヨサー		○			
	十七八節		○		◎	○
	ましゅんく節		○		○	
	汗水節		●		○	○
	県道節		●			
	ヨー加那ヨー			○	○	
	旅や浜宿い			○		○
名護から			○	○		
夜起キシタクリ			○		●	

表Ⅱ 踊り手の歌唱が歌全体に占める割合

単位 %

	今泊	兼次	崎山
本調子	41.5	42.2	43.9
一二揚ギ	43.8	41.4	43.6
全 体	42.1	41.8	43.8

歌唱率に算入しなかったもの

- ・前囃し
- ・任意に入る「イヤササ」等
- ・今泊《御願節》
- ・兼次《サヨサー》

…… 崎山では《七月念仏》
 …… 兼次では《唐船どーい》

…… 一般には《真山節》

…… 兼次では《兼次板干瀬》

…… 一般には《白保節》の囃し

…… 今泊では《イルサスラ》
 …… 崎山では《イルサスネ》

…… 兼次では《だんく》

…… 今泊では《仲門へい》
 …… 今泊では《国頭岬から》
 …… 今泊では《御願節》
 …… 兼次では《里が》

…… 一般には《世果報節》

…… 一般には《帽子くまー》

願節》は、曲自体の旋律は《弥勒節》だが、前後に兼次《サヨサー》と同様の所謂《世果報節》の三線の旋律が付随する。兼次《サヨサー》と今泊《御願節》とは全く同一歌詞であり、ともに家に向かって縦列となることから、両者には密接な関連があることがわかる。

兼次の現行曲は、数が少ない割には他字と異なる曲が多い。古くからの曲には他地域のレパートリィとの重複が多いから、もとはほぼ同じレパートリィであったものが次第に減少し、更に変更があったことがわかる。兼次では踊りが縦列のものも4曲あるが、それはこうした曲目の変更と関わっているのであろう。なお、こうした新しいレパートリィの多くは八重山出自の曲である。

崎山もほぼ他地域と同様のレパートリィである。しかし、ここには今泊や兼次のような縦列の踊はなく、所謂新しい面は見られない。

他に筆者が調査済みの範囲で今帰仁村に一般的な曲としては、《三村節》《目出度い節》などもあげられるが、3字のレパートリィは、ほぼ今帰仁村の主要レパートリィであるということができよう。

・本部町との比較

一方、本部町のエイサーには他に《目出度い節》《嘉手久屋小》などが複数の字で伝承されるが、やはりかなり今帰仁と類似したレパートリィであることがわかる。本部町のエイサーは基本的な舞踊の形態、担い手、テンポの点でも今帰仁村と基本的に共通しており、両者はエイサー文化としては同一の基盤であることが確認できる。なお、名護市(旧屋部町)勝山のエイサー資料[外間編 1980:412-419]などにも類似点が多いことから、これには、旧屋部町も含まれるのではないかと考えられる。(筆者の旧屋部町調査は、本年度からの課題である。)

・国頭村・大宜味村の女エイサーとの比較

女エイサーと比較すると、ここにあげた曲目にはかなりの一致が見られる。しかし、今帰仁村の定番的な曲《二合小》《稻摺り》《谷茶前》等は、女エイサーにはそれほど多くは見られない。逆に、女エイサーに多い《八重山》《伊計離》《伊集ぬがまく小》《とぅーたんかに》《瀬嵩》《高離》等が、今帰仁村には全くない。両者の主要レパートリィには、ずれがあることがわかる。一つには、これら女エイサーの定番曲が早弾きには適さないということが挙げられるが、三線の有無、性別・踊り方の違いなどの諸要素も関わっているのであろう。これは今後の課題としたい。

2. 音階とテンポ

音階

3か字の現行曲の音階は、呂音階を除き、概ねドミ（或いはドレ）ファソシド¹レ¹ファ¹の音列として顕れるが、以下のように分類することができる。

- ① 呂音階。ドレミソラド¹。

《新安里屋ゆんた》

- ② 律音階が基調となる旋律。ファは核音として顕れる。

《サヨサー》《十七八節》⁽¹⁵⁾

- ③ 琉球音階で、暗に律音階を含む旋律。多くの場合、ファソシ^bの律テトラコルドが琉旋化したと考えられ、ファは核音として顕れる。

《念仏》《二合小》《テンヨー》《七月念仏》《蛙越いる》《前田節》

《祝い節》《弥勒世》《弥勒節》崎山《何ガ夕辺》

- ④ 3度堆積が中心の音階からなる旋律。ドミソシド¹、ドミソシレ¹などが基本音列で、ファは殆ど経過的である。

《稲摺り》《スリ東》《今帰仁ぬ城》《海やからー》《九年母ん木》

《伊舎堂ん前》《あっちゃ舞小》《谷茶前》《テンスナー》《汀間当》

- ⑤ 3度堆積や、ドレファの律のテトラコルドが混在する旋律

その他の曲

- ②③の律音階を含む旋律には、本調子の曲が多い。

テンポ

円陣の踊りは、何れも比較的速いテンポであり、三線は全曲とも所謂早弾きのリズム（♪♪♪♪に近い）で演奏される。今泊では♩=110～116、兼次では104～112で安定しており、崎山では最初の♩=104程度が徐々に加速し、本調子の終わりでは♩=132-138にまで達する。一二揚ギも同様である。但し、新参の縦列舞踊や新民謡ではややテンポが遅くなる。

したがって、基本的に今帰仁のエイサーは、テンポが1種類であるということができる。この点では、本部町の手踊エイサーと共通するが、♩=70前後と♩=130～180（ムラによる）前後の2種のテンポの曲を程良く配列する国頭・大宜味の手踊り女エイサーとは異なる。

3. 3ヶ字にみられる旋律や歌詞の特徴

ここでは、特徴があると思われる歌の旋律や歌詞について考察する。

《念仏》

3字のエイサーでは何れも第1曲目が《念仏》である。沖縄の《念仏》には数多くの歌詞があるが、一般に《継親念仏》《仲順流》《親ぬ御恩》などがよく知られ、エイサーでも長い念仏句を歌う場合がある。しかし、今帰仁ではこうした念仏句を全く歌わず、盆に土で作った「みちゃ仏」を飾るという一節や「山に育つ鳥」の歌詞を歌う。鳥の歌詞は本部町にもあるが、「みちゃ仏」の歌詞は、現在までの筆者の調査に依れば、今帰仁エイサーにのみ伝承される。

旋律は、〈譜1〉のように、一般的な《念仏》と同系だが、テンポが異なり、また歌詞の音数が《念仏》に一般的な八五調ではなく不規則であるため、リズムもやや異なる。また、一般の《念仏》は八五調の歌詞4句で全体の旋律が構成されるのに対し、今帰仁では八五調2句分の旋律（八・五。一般の《念仏》の前半の旋律）しか見られない。⁽¹⁶⁾今帰仁・本部の《念仏》は、一般的な《念仏》の前半の旋律しかない形で伝播・定着していったとみられる。

譜1 念仏

国頭村 与那

今帰仁村 崎山

しーちくわーちーーみーぐーらーば

しちくわーちやーーはちーくわーちや

さーーきーーたーぼーりヒヤ

みちやぶとうーけーんーかーざーてい〈エイサー

ルガエイサーーサエイサーエイサーーササ

ーサエイサーヒヤウリササースーリササ〉

与那採譜 [日本放送協会 1993 : 353]

《二合小》

《二合小》は、エイサーの代表的な門付け歌である。今泊・崎山で伝承されるが、兼次では過去の曲となっている。今泊・崎山両字の旋律はほぼ同じで、他地域の曲とも共通する。両字ともに《念仏》より後で歌われるが、玉城鎮夫氏によれば、兼次では「此まから来んでいいみせーたん」という口上に続いて歌われたらしい。歌詞の内容が門付けそのものであり、本部町伊野波や渡久地・辺名地・瀬底などでは《念仏》より先に歌われるので、あるいは今帰仁も元は

口上「此まから来んでい」→門付け《二合小》→念仏→その他の順に踊る形態であったのではないかと考えられる。

《加那ヨ一》

《加那ヨ一》は雑踊《加那ヨ一》と歌詞・旋律ともに同系だが、上句の前半の後に踊り手の囃しが入ることが特徴で、ここにエイサー歌らしさがある。エイサー終了後のカチャーシーでも《加那ヨ一》が歌われるが、この時は間に囃しが入らない雑踊的な《加那ヨ一》である。

《七月念仏》……一般には《健堅辺名地》

この曲は、現在は崎山にしかないが、かつて兼次でも歌われていたもので、同系曲は大宜味村塩屋の総踊や本部町のエイサーにも僅かにみられる。本部町（旧上本部村）備瀬の七月舞や今帰仁村兼次では、かつてこの曲で本調子が終わったと言われているので、本来は本調子の締めくくりを踊り手に示す符丁の曲ではないかと考えられる。崎山では《念仏》の2節目のように扱われ、歌詞も「健堅辺名地～」ではないが、これは、囃しが《念仏》とよく似ていたことから同化した結果と推察できる。

《稻摺り》《テンヨ一》《スリ東》《今帰仁ぬ城》《海やから一》《伊舎堂ん前》《畦越いる》《前田節》《谷茶前》《イルサスナ》《カマヤシナ》《だんこ》《デンスナー》
《仲門へい》《国頭岬から》《赤山》《汀間当》

これらは一般の民謡でもよく知られた歌で、旋律や囃しも他地域のエイサーや民謡と殆ど同じである。歌詞も概ね同様であるが、《デンスナー》のように本部町の地名を詠み込んだ歌詞や、《テンヨ一》の「東^{あがり}ん門^{じょー}ぬ月^{ぎぎち}橋～」のように他地域にない歌詞は、今帰仁エイサーの特徴といえよう。

また歌詞内容の点で、ポピュラーな《今帰仁ぬ城》以外に、本部町（旧本部町・

上本部村) 側に今帰仁の地名を織り込んだ歌詞が見られないのに対して、本論の今帰仁村の3つのエイサーには、本部町の字名を織り込んだものが4旋律7首(出現する字数は10) あることに注目したい。このことは、今帰仁のエイサー自体か、その主なレパートリィが旧本部町方面から伝播したことを示唆すると考えられるが、確たる証拠・証言は得られていない。

4. 歌詞と旋律構成

歌詞と旋律との関係では、歌詞の詞型、旋律との対応の二点について述べる。

詞型では、琉歌の短歌(八八八六)、七五調、音数律不定なもの、がみられる。このうち琉歌が最も多いが、実際には上句部分しか歌われていない場合も多い。また、《海やからー》のように、一節目は字余り琉歌で、2節目は音数律不定の歌詞という例もある。音数律が不定なものは、例えば「気張りよーやうないぬ達
いちゅうま(いちゅうま)かみらさやー」のような2句的構成、「此まぬはん
し前や 御肝ぬ良たさぬ 愛々とう」(二合小)のような3句的構成や、《汀間
当》のように音数律が不定な上に歌詞の長いものがみられる。七五調は《カマヤ
シナ》《国頭岬から》で、両方とも七五から展開する。

歌詞と旋律の対応の点では、曲の1節(旋律の1周期)が歌詞1首に対してどのような長さに相当するかを、曲名で分類すると、以下のようになる。⁽¹⁷⁾

(以下、無印は琉歌、七五調は七五、音数律不定は音と記す。)

歌詞1句分で曲1節

《蔓葉》《ヨー加那ヨー》……両曲とも2句分しか歌詞がない。

歌詞2句分で曲1節……琉歌では上句下句で旋律を反復することになる。

《テンヨー》《スリ東》《今帰仁ぬ城》《何ガ夕辺》《伊舎堂ん前》

《祝い節》《イルサスナ》《加那ヨー》《あぬ杜》

《ましゅんく》《旅や浜宿い》 音《稻摺り》《谷茶前》

歌詞を3句・4句まで通して曲1節

《海やからー》《畦越いる》《前田節》《弥勒世》《兼久板干瀬》

《だんこ》《デンスナー》《御願節》《赤山》《十七八節》

《名護から》《夜起キシタクリ》

音《二合小》《七月念仏》《九年母ん木》《夜や明きたい》《仲門へい》

音《汀間当》 七五《カマヤシナ》《国頭岬から》

この分類から、3句・4句まで通した曲が比較的数量が多いことと、音数律が不定な歌詞は殆ど通して1節で歌うことがわかる。琉歌が歌詞の大半を占める白太鼓では、1句乃至2句分で1節になる旋律が4句通しの旋律よりはるかに多いことと比べると、エイサー歌にはかなりの違いがあるといえる。おそらく、それにはエイサーにみられる琉歌以外の歌詞の存在と、歌が作られた時代の違いが関わっているのであろう。

5. 歌い手の歌唱と踊り手の歌唱

今帰仁のエイサー曲では、歌い手が歌と三線を受け持ち、歌を歌い出すことで踊り手をリードするが、踊り手も様々な形で歌に参加する。とりわけ旋律1節中の後半（主に囃し部分）は、踊り手が歌うのが基本的な形である。

歌唱全体の中での歌い手と踊り手が各々占有する時間比を、全曲の拍数で換算したのが、〈表II〉（前出〈表I〉の右横）である。ここから、各字とも歌唱全体の41~44%を踊り手が担当していることがわかる。（このうち、踊り手が歌い手と同じかそれ以上の時間を占める曲が、今泊で19曲中5、兼次で15曲中4、崎山で22曲中8曲ある。）この点で、今帰仁エイサーは女エイサーと同様、踊り手が歌い手と互角に近い形で歌唱に参加していると認められる。

この踊り手が歌う部分について、小林（幸）は「沖縄本島北部の女エイサーの歌唱様式」において、

- i. 本来の歌詞から独立した固有の後囃し
- ii. 地謡（歌い手）の歌詞の反復
- iii. 地謡の囃しの反復
- iv. 本来の歌詞の分担

という4分類を示している。[小林（幸） 1991：6-7]

これを今帰仁村の3ヶ字のエイサーにおける踊り手の歌唱部分にも適用して、更に歌詞内容についての検討を加えると、以下のように分類できる。

- i A 「スリサーサー」「ヒヤルガヘイササ」のような一般的な囃し詞を中心とした、特に意味を持たない囃し。

《念仏》《テンヨー》《スリ東》《今帰仁ぬ城》《七月念仏》

《哇越いる》《サヨサー》《ヨー加那ヨー》

《あぬ杜》の後半、《ましゅんく》の後半

- i B 歌固有の囃し詞で、歌詞と一定の関連を持っているが、掛声的に各節で繰り返されるもの。⁽¹⁸⁾

《二合小》《稲摺り》《海やからー》《前田節》《祝い節》《弥勒世》

《新安里屋ゆんた》《夜や明きたい》《イルサスラ》《加那ヨー》

《旅や浜宿い》《夜起キシタクリ》崎山《ダンコ》今泊《デンスナー》

- i C 歌固有の囃し詞で、歌詞と関連して各節で変化するもの。

《何ガ夕辺》《兼次板干瀬》《蔓葉》《国頭岬から》、

《赤山》《十七八節》、⁽¹⁹⁾《汀間当》の後囃し、

- ii 歌い手の歌詞を反復するもの。

《伊舎堂ん前》《谷茶前》《仲門へい》《御願節》

《あぬ杜》の前半、《ましゅんく》の前半

- iii 歌い手の囃しを反復するもの。

兼次《スリ東》の前半、崎山《カマヤシナ》

- iv A 歌詞の途中の一部を分担するもの。

《兼次板干瀬》《汀間当》

- iv B 例えば琉歌の4句目など、歌詞の後半部分を担当するもの。

《里が》《九年母ん木》《名護から》今泊《二合小》

今泊《カマヤシナ》今泊《だんこ》崎山《デンスナー》

囃しの4分類では、「i. 独立した固有の後囃し」が圧倒的に多いが、囃し詞の内容を検討すると、「i A. 一般的で特に意味のない囃し詞」より、「i B・C. 歌に固有の囃し詞」を用いたものの方が多く、「i C. 明確な意味を持つ囃し詞」も相当数あることがわかる。また、「ii. 歌詞の反復」「iv. 歌詞の一部の分担」も、やや地域的な偏りはあるが相当数みられ、全体として歌詞自体との関わりが深い囃しが多いことがわかる。

次に、歌い手と踊り手の担当部分の位置や両者の関わりに注目すると、後半に歌い手が関わったり、逆に、踊り手が前半の歌詞に加わる曲も多々見られる。《何ガ夕辺》は前者の典型的な例（歌詞篇 今泊7、崎山3参照）で、囃し詞を、歌

い手—踊り手—歌い手—踊り手が短いフレーズ毎に交互に歌い合う。こうした例は《蔓葉》や今泊の4曲《二合小》《テンヨー》《イルサスラ》《谷茶前》にもみられる。

一方、後者の例は、《兼次板干瀬》《汀間当》今泊《二合小》今泊《だんこ》であるが、この場合も結果的に歌い手と踊り手が短いフレーズを交互に歌い合うことになる。また、歌詞の句切れに囃しが入る曲《スリ東》《前田節》《加那ヨー》や、曲中で歌詞が反復する曲《ましゅんく》も同様の交互唱となる。

この他には、踊り手が歌詞部分の一部と囃しを歌い込んだ今泊《カマヤシナ》崎山《デンスナー》《名護から》、囃し旋律を反復する《旅や浜宿い》など、踊り手の歌唱部分が歌い手よりはるかに長いものもみられる。また、歌い手の歌の間に「イヤササ」と囃しをかけたり、歌い手の歌に重ねて囃しを掛ける《海やから一》崎山《カマヤシナ》のような歌い方もみられる。

・国頭村・大宜味村の女エイサーとの比較

今帰仁エイサーを女エイサーと比較すると、踊り手の歌の内容や歌い方が、以下のように、より重要でかつ多様であることが見出される。

- ① 女エイサーでは殆どの歌が前半が歌い手、後半は踊り手という図式で展開しており、さらに両者が細分化した歌い合いは、《高離》などごく一部の曲でしかみられない。これに対し今帰仁村では、今泊10曲、兼次5曲、崎山4曲と、各字にこの歌い方が見られる。
- ② 歌い手の歌詞の反復以外に、歌詞を踊り手が担うものは女エイサーでは殆ど見られない。これに対し今帰仁村では、今泊5曲、兼次3曲、崎山2曲にこの歌い方がみられる。

歌い手が全部を歌っても構わない歌にも踊り手が参加したり、歌い手と踊り手が短いフレーズを歌い合うといった歌のあり方は、歌という観点から見れば、野^も遊^{あし}び等で2集団が掛け合った歌の伝統とも関わっていることが考えられる。こうした歌の多くは、実際に野遊^{あし}びで歌われたものでもあるのではなかろうか。

6. 踊り手の歌唱と踊りの所作

5. に述べた今帰仁エイサーの歌い手と踊り手の歌唱関係は、踊りの所作とどのように関わっているのでしょうか。

新参曲の一貫して舞台芸的な振り付けを除けば、今帰仁エイサーの所作は、筆者の分析によれば次の6種の組み合わせで構成される。

- ① カチャーシー風の腕の動きを伴いながらの、円周方向の歩行
- ② カチャーシー風の腕の動きを伴いながらの、円周方向の反転。
旋回は常に円の外側を向いて行われる。
- ③ 片掌を腰に当て、他方の片腕を前に突き出しながらの、円周方向の歩行。
各字とも《念仏》後半には必ず現れる。
- ④ 円中央を向き、2拍毎にステップを踏みながらのカチャーシー風の腕の動き
- ⑤ 円中央を向き、片足を前に出し、心持ち前傾しながらの、拍手
- ⑥ 円中央を向いての、当て振りや舞台芸的な所作

このうち①②はどの曲にもあるが、④⑤は一曲中に必ずしも両方は出現しない。⑤は各節の曲尾に多く現れる。⑥は比較的少数で、《稻摺り節》の脱穀の臼挽きの様、《何ガ夕辺》の雨降りの模写、《前田節》の酒を飲む仕草などに現れる。これらの特徴に関しては、本論で考察してきた3ヶ字のエイサーも例外ではないが、同系の曲でも字によって組み合わせが少しずつ異なる。

以上からわかるように、①②は極めて単純な所作であり、③④⑤⑥はそれに比べれば踊りとしての要素の濃いものと言うことができる。各曲の各節は先ず①で始まる。その後の構成は曲によって異なるが、各節の最後は⑤（拍手）→②（反転）の連続を伴うことが多い。②は1節の中で通常2乃至4回現れる。

これら①～⑥は、以下のように、歌い手と踊り手の歌唱関係と密接に関連している。

a) 歌い手が歌う時の踊り手の所作

①②しか現れない。必ず①で始まり、通常2乃至4拍目（字による）に②に移り、旋回しながら2拍分程度で逆向きの①となる。
要するに、踊り手衆は全体としては円周を廻っている。

b) 踊り手が歌う時の踊り手の所作

本来の歌詞の間に短い囃しを挿入する時は、②となることが多い。字と曲によっては、③腕出し や④中向き にもなる。

長めの後囃し詞の時は、③や④あるいは②の連続となる。今泊は通常④、

兼次は④③、崎山は③が多い。仲宗根周辺では⑥の頻度も高い。

各節の最後は、通常、⑤拍手→②反転の連続を伴う。

したがって、踊り手衆は③以外の場合は円周を廻らない。

・国頭村・大宜味村の女エイサーとの比較

かつて小林幸男は、国頭村・大宜味村の女エイサーの歌い手・踊り手の歌唱と踊りの所作との関係を次のように要約した [小林 (幸) 1991: 7]。

a) 打ち手が歌う時の踊り手の所作

①右手の手巾を肩の上でひらめかせる、②頭上で両手首を返す、③腰の脇で手巾を振る、の何れかを曲によって反復しながら、通常、反時計回りに円周を廻る。目立った仕草は一切しない。

b) 踊り手が歌う時の踊り手の所作

④旋回、⑤左手を腰にあてる、⑥両腕の交差や片手の振り下ろしなどを伴う細かいステップ (重心移動)、などの様々な所作を曲により組み合わせて連続して行なう。したがって、踊り手は基本的には円周を廻らないで、より踊りらしい所作に移る。

今帰仁エイサーと女エイサーを比較すると、基本所作の違いや、女エイサーの所作の方が多様である点、また曲中の旋回の位置の違いなどを除けば、

a) 歌い手が歌う時には、踊り手は目立った仕草をせず、円周を廻る、

b) 踊り手が歌う時には、踊り手はより踊りらしい所作に移る、

という点で両者は一致した原則に立っていることが判る。踊り手は、各節の後半部分では舞踊のみならず歌唱においても、主導権を持っているのである。

7. エイサー歌の旋律

今帰仁のエイサー歌は、前述のように速いテンポのメドレーで歌われる。各々の旋律は全体に短いものが多く、また、細かい装飾や声の技法は殆どみられない。囃しを除くと、各曲の歌い出しの音やそれに続く数音は〈譜2〉(資料編 比較総譜欄) のようにならかなり似通っており、特に字毎に見るとその傾向は顕著である。今泊では本調子の曲は ソシド¹、一二揚ギではミソシかミファソ (ドミファソシド¹レ¹の移動ドで) と歌い出され、崎山でも、一二揚ギでは、ミファソ、ミソシで歌い出すものが大半を占める。また、一二揚ギの終止部分は、多くの曲が

下行してドで終わり、囃しへと続くという形になっている。

このように類似した歌い出しの旋律を、《新安里屋ゆんた》のように明らかに戦後取り入れられた曲を除いて整理すると、以下のようなまとまりに分類することができる。

1) 本調子

山型の旋律

ミ終止 《スリ東》……全体に山型の旋律

上下する旋律

ソ終止 《今帰仁ぬ城》…開始→上行→6度の下行→開始音
《海やから一》…ソを中心に上下する旋律である。

下行的な旋律

ファ終止 《健堅辺名地》《夜や明きたい》…終止近くで下行。
《テンヨー》《何ガタ辺》…ファ¹まで上行してから下行。
ファ（ファかファ¹）を経てドに戻り、ファまで順次進行で下行。両曲の違いはファかファ¹の2小節のみ。 〈譜3〉

ミ終止 《稲摺り》《九年母ん木》…上行してから下行。 〈譜4〉
《兼久板干瀬》もほぼ同系の旋律線である。

ド終止 《二合小》《前田節》…中間の3小節分《二合小》が短いが、歌い出しと終止の5小節はほぼ同じである。 〈譜5〉
《伊舎堂ん前》もほぼ同系の旋律線である。
《畦越いる》…終止の2小節は《二合小》《前田節》に同じ。

なお、《念仏》は高音ファ¹へと進み、それを頂点にド¹音まで下がった所で終止している。他地域の一般の《念仏》には、引き続き全体に音域を下げファで終止する後半の旋律があるが、今帰仁ではこの後半部分を欠くために分類に加えていない。

2) 一二揚ギ

全体に下行していく旋律

……《十七八節》

<譜 3>

テンヨ
(今泊)

何がタビ
(崎山)

Musical notation for '譜 3' consisting of two staves. The top staff is for 'テンヨ (今泊)' and the bottom staff is for '何がタビ (崎山)'. Both are in 2/4 time. The melody consists of eighth and quarter notes with some rests.

<譜 4>

稲摺り
(崎山)

九年母ぬ木
(今泊)

Musical notation for '譜 4' consisting of four staves. The top two staves are for '稲摺り (崎山)' and '九年母ぬ木 (今泊)'. The bottom two staves are additional parts of the melody. The time signature is 2/4.

<譜 5>

前田節
(今泊)

二合小
(崎山)

Musical notation for '譜 5' consisting of four staves. The top two staves are for '前田節 (今泊)' and '二合小 (崎山)'. The bottom two staves are additional parts of the melody. The time signature is 3/4.

山型の旋律

〈譜6〉(資料編 比較総譜欄)は、これらの旋律を《加那ヨー》《蔓葉》のような長めの旋律を基準に比較総譜としたものである。

これからわかるように、何れも山型の旋律の組み合わせで曲が構成される。山型の下行部分の終点はドで、① 5小節目、② 13、14小節目、③ 17小節目の3箇所に行の終点がみられる。

各箇所の下行の終点で、今帰仁3ヶ字の一二揚ギの曲を分類すると、以下のようになる。

②……山型が1つの、最もシンプルな旋律

《谷茶前》《イルサスネ》《あぬ杜》《ヨー加那ヨー》
《名護から》

③……《デンスナー》

①②……《カマヤシナ》《仲門へい》《国頭岬から》《ましゅんく》

①③……《旅や浜宿い》

②③……《だんこ》《赤山》

①②③…《蔓葉》《加那ヨー》《夜起キシタクリ》

これらの曲では、終止点と同じ曲ほど全体の旋律線の類似度も高い。

なおこの他に、長さや終止などに違いが見られるものの、《汀間当》がやはり山型から成る旋律で、5つの山型で構成される。

全体の旋律線の類似の他に、各々の旋律は、以下に見られるように部分的にはほぼ同じ旋律も共有している。

《蔓葉》《ましゅんく》《汀間当(前)》……各 2-5小節

《蔓葉》《ましゅんく》…… 各 6-10小節

《イルサスネ》 1-3, 10-11小節 = 《谷茶前》 1-4, 9小節

《デンスナー》 8-10小節 = 《ましゅんく》 8-10小節

《デンスナー》 5-6小節 = 《赤山》《だんこ》 5-6小節等

《赤山》 1-7小節 = 《だんこ》 1-7小節

《赤山》 11-14小節 = 《汀間当(前)》 11-13小節

《赤山》 15-17小節 = 《蔓葉》 15-17小節

また、一曲全体をみた場合には、以下の例のように、あたかも旋律がモザイク

のようになっていることがわかる。

《ダンスナー》	1-4小節・9-12小節	=	《蔓葉》	9-12小節
	5-6小節	=	《赤山》《だんこ》	5-6小節
《赤山》	1-7小節	=	《だんこ》	1-7小節
	11-14小節	=	《汀間当(前)》	11-13小節
	15-17小節	=	《蔓葉》	15-17小節など。

要約すると、一二揚ギの大半の曲の旋律では、歌い出しと終止の音型はほぼ共通しており、上記の曲全体が同系の旋律であるといえなくもない。これは、同じような山型の旋律で曲が構成されているからであり、曲の長さの違いも山型の旋律の数と関連しているからである。

3) 調絃と旋律線

先に述べたように、本調子の曲には、山形の旋律・上下する旋律・下行的な旋律の3種があるが、この中では下行的な旋律がもっとも多い。一般的な《念仏》や、今帰仁3ヶ字では現在伝承されない《久高万寿主》《目出度い節》も、やはり下行的な旋律である。一二揚ギで唯一下行的な《十七八節》も加えて、下行的傾向を持つ曲をみると、《念仏》《二合小》《前田節》《畦越いる》《伊舎堂ん前》(3ヶ字以外では前出の《久高万寿主》《目出度い節》も)や《十七八節》などは、明らかに本土から伝わったり、その影響下で成立したと考えられる曲である。⁽²⁰⁾従って同系の下行的な旋律も同じような経緯で成立した可能性がある。そしてこのような曲が特に本調子に集まっている背景には、エイサーが本土と関わりの深い浄土宗系念仏歌を核に発展したことが関係していると考えられる。

一方、ここで取り上げた一二揚ギの旋律は、《十七八節》を除いた全曲が、歌い出しで上行し、終止部分で下行してド音で終止するという構造を持つ。曲によっては同じような上行下行を繰り返したり、互いに類似した音型を共有しており、あたかも全曲が1つの旋律のヴァリエーションのように見える。しかし、こうした類似旋律は、エイサー独自の曲ではなく、一般の民謡として他の場や芸能の中でも歌われる曲であるから、字毎の顕著な歌い出しの類似はともかく、エイサーとして一二揚ギの曲をまとめて演奏するうちに類似が自ずと生じたとは言い難い。むしろ、エイサーが念仏歌を核として、本調子の歌から次第にレパートリィを広げ

る中で、余興的な一二揚ギの類似曲が数多く加えられていった結果と考える方が妥当である。

これらの曲は今もよく歌われるが、エイサーに取り入れられた時代（明治時代か？）には、おそらく大流行していたのであろう。実際、《加那ヨー》《谷茶前》《カマヤシナ》などは雑踊歌・芝居歌として流行したものである。したがって、こうした曲はヴァリアンテというより、同じような言い回し（＝旋律法）を使って次々と歌われていった一群の曲と考えた方がよいように思われる。

これらの共通の旋律を異なった曲として存在させているのは、先ずもって囃しの旋律と詞章であり、それらは歌の旋律に対して極めて多様に展開している。エイサーではこうした囃しを、歌い手と踊り手という組み合わせ、更に踊りの所作との組み合わせで、実に巧みに取り入れているのである。

おわりに

以上、3ヶ字を中心に今帰仁エイサーについて考察したが、その結果としては、以下の点を指摘することができる。

- ・ 今帰仁エイサーのレパートリィは、本部町や名護市の伝統的エイサーとほぼ同様であるが、国頭村・大宜味村の女エイサーとはやや異なっている。
- ・ 今帰仁エイサーのレパートリィには独自性がみられないが、歌詞には若干独特なものが見られる。また、《念仏》が一般に見られるものの半分の長さであることと、「みちゃ仏」を歌っている点に特徴がある。
- ・ 歌は歌い手と踊り手の歌い合いで成立する。踊り手が歌う部分は、単なる囃しから歌詞本体まであり、この点では女エイサーに比べても多様である。
- ・ 今帰仁エイサーの踊り方は、歌い手と踊り手との歌唱関係に密接に関連している。踊りの基本所作は6種類あり、踊り手の歌唱をきっかけとして動きが変化する。こうした踊りと踊り手—歌い手の関係は、本部エイサー・女エイサーとも基本的に同じだが、本部エイサーが最も素朴で、女エイサーが今帰仁以上により多様な踊り方をする。女エイサーの所作が多様であるということには、男が見物に廻るため、「観せ、観られる」ことをより意識せざるを得なかったことも起因しているかもしれない。

今帰仁のエイサー歌には、囃しを除いた歌の本体とも言うべき部分が同系旋律的である歌が多く見られる。本調子にも幾つかの下行旋律的な類似曲があるが、同系旋律的傾向は一二揚ギの曲に特に顕著である。こうした旋律を曲として主に区別するのは、歌部分に続く変化の多い囃し詞である。

今帰仁エイサーは、速いテンポで歌が連続し素朴で数少ない踊り方のため、一見全部同じように聞こえ、また見える。しかし、歌も踊りも一つひとつをよく見ると、素朴ながらも、踊り手と歌い手の掛け合いや、そうした歌い方と踊りの組み合わせなどが実に巧みに工夫されていることがわかる。

また、本調子で1曲、一二揚ギで1曲とも聞こえるように短い歌を立て続けに歌い継ぐ今帰仁エイサーだが、実際には各々10曲前後あり、ちょっとした「沖縄民謡集」を呈する。中部の太鼓エイサーはテンポも全体にゆっくりとしており、大人数で踊ることもあって、曲数はあまり多くない。一方、女エイサーは曲数は多いが、太鼓伴奏であるため、三線との関係は捉えにくい。

こうした点からみると、今帰仁エイサーは、歌の数も多く、三線付きということもあって、念仏歌を核に流行歌を吸収して成立したエイサーの流行歌部分についての、また、かつて青年男女が三線・太鼓で歌を掛け合い踊り遊んだ様子を探るための、手がかりを与えてくれるようにみえる。

近年、太鼓エイサーは観せるエイサー・観るエイサーとして注目を浴びている。一方、今帰仁エイサーのように素朴な手踊エイサーには、太鼓エイサーの整然とした美しさや衣装の華やかさは殆どない。しかしそのかわりに、辻々や広場でのエイサーには、誰もが踊り手として加わり、ともに盆を過ごすことのできる気楽さ・良さがある。太鼓エイサーの華やかさの一方で、こうしたエイサーは残念ながら減少しつつあるのが現状だが、皆がともに歌い踊ることのできる手踊りの長所と、今なお他には見られないほどの豊かな掛け合いの様式を持つ歌・芸能の素晴らしさが見直される日が、遠からず来るに違いない。

最後に、この紙面をお借りして、エイサーについて快く教えてくださった今泊・兼次・崎山の皆さまに、心より御礼申し上げます。

註

- (1) とともに、沖縄県立芸術大学附属研究所平成8年度共同研究員。
 小林 公江 天理大学教養部助教授（音楽学）
 小林 幸男 京都教育大学教育学部助教授（音楽科教育）
- (2) 筆者の調査の範囲では、沖縄本島南部では「ヤイサー」、中部では「エイサー」、北部では「七月舞」次いで「七月エイサー」が、最も一般的な呼称であった。
- (3) 与勝（勝連町・与那城町）ではパーラン鼓を用い、他地域は締太鼓（+大太鼓）を用いる。
- (4) 例えば糸満市喜屋武では、慶留間知徳氏からの筆者（小林公江）の聴取によれば、26、7年前（1993年の時点）までは念仏歌を歌いながらぐるぐる廻る「ヤイサー」があって、これが済めばカチャーシーなどもやり、酒やお金をもらっていた。男女合わせて一組あたり17～18名程度が、盆の13～14日に仏壇のある家を5分ずつ程で廻ったという。これに対し、現在の喜屋武のエイサーは、与那城村（当時）屋慶名から習い覚えたパーラン鼓の太鼓エイサーである。
 また、今帰仁村湧川では元は手踊りであったが、15年ほど前（1995年の時点）から名護市港区、久志から太鼓エイサーを習い、現在に至る〔名護市青年エイサー祭り実行委員会 1995：11〕。手踊エイサーから太鼓エイサーへの交替は名護市（旧屋部町）安和、本部町（旧上本部村）備瀬などにもみられる。
- (5) 45ヶ字のうち、実際に演じるのを筆者2名が目で確認したのは、1996年現在で36。残りの9ヶ字は、各々の字の人からの聴き取りに依る。なお、伝承字（あざ）数には、老人会が主に演じるものも含まれる。
- (6) 伊藤真理は、1993年の2日間の単独の予備調査と合同の8日間のフィールド・ワークの成果を、同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業論文〔伊藤 1993〕にまとめた（卒論指導は小林幸男）。本部半島の手踊エイサーに関する音楽学的研究としては、これまで唯一のものである。
- (7) 豊年踊は現在、今泊・諸志・与那嶺・仲尾次・崎山・謝名・玉城・仲宗根・運天・上運天・勢理客・湧川で行われている。〔今帰仁村教委 1995：81〕
- (8) 筆者らの調査では、本部町伊野波・辺名地・渡久地・浜元・具志堅、国頭村与那では臼太鼓の後の余興として、また本部町備瀬や大宜味村田嘉里では昔の名残として

(現行は太鼓エイサー)、手踊エイサー(七月舞)を行う。

- (9) かつて親泊・湧川に白太鼓があったとの報告 [國頭郡教育會 1919:290-292] [中山他 1990:331] があるが、今では皆目分からない状態にある。
- (10) 地元では、この調絃は通常「二揚ギ」と称されているが、実際は「一二揚ギ」なので、本稿では「一二揚ギ」と表記する。なお、琉球古典音楽と異なり、沖縄民謡で実際に二揚ギに調絃することは、ごく稀れといってよい。
- (11) 中部エイサーの数地域のテンポに関しては、例えば、『日本民謡大観(沖縄・奄美) III 沖縄諸島篇』のエイサーの採譜を参照されたい。
- (12) 但し、兼次の新参曲《弥勒世》のみ、手拭いを持つ。また、かつて玉城では扇を用いた曲《念仏》《具志堅小唄》もあったというが、現在では廃されている。
- (13) 《夜起キシタクリ》で歌詞部分が《ダンスナー》の旋律に同化し、囃しのみ《夜起キシタクリ》であったことは、歌の変化に関する問題として報告しておく。
- (14) 今帰仁エイサーは諸志・与那嶺・越地・仲尾次・仲宗根・玉城、本部エイサーは伊野波・渡久地・辺名地・備瀬・具志堅の録音資料と瀬底の歌詞資料 [瀬底誌 1995:334-342] を参考とした。
- (15) 民謡《十七八節》は、徳之島《餅貰え歌》等と同様、歌の旋律線や囃し詞から見て、明らかに本土の祝い歌《高い山から》=《ドンドン節》のヴァリエーションである。琉球音階化して歌われるが、元の律音階の骨組みも失われていない。
- (16) 《念仏》の比較譜では、一般的な《念仏》の例として国頭村与那の《七月念仏》を用いた。後半の旋律は省略し、囃し詞部分は2種類ある与那の囃し詞のうち、今帰仁の形に近いものを載せている。
- (17) 《念仏》は本来、4句通し旋律だが、今帰仁では半句分しかないので除外した。また、歌謡曲《新安里屋ユンタ》も七七七五の歌詞を、元歌の《安里屋ゆんた》の九九(五四五四)の対句にはめ込んでいるため除外した。
- (18) 《夜起キシタクリ》《旅や浜宿い》は一節しかないので、繰り返し不明だが、類似する備瀬曲などを考慮して分類した。また、《前田節》《夜や明きたい》《旅や浜宿い》の文の形で返す囃しは、本来は歌詞に対応して変化する可能性もある。
- (19) 今泊の《赤山》は「ハラユイユイ」という意味のない囃ししか歌わないが、これはむしろ例外で、今帰仁村の他字や一般には《赤山》の囃しは歌詞に対応して変化するため、ここに分類した。

《十七八節》は一節しか歌われていないが、他地域のものも考慮して分類した。

(20) この点では [金城代表 1994 : 38-42] 中の、小林幸男の報告も参照されたい。

文 献

今帰仁村

1992 『1992版今帰仁村村政要覧』 今帰仁村役場総務課

今帰仁村史編纂委員会

1975 『今帰仁村史』 今帰仁村役場

沖縄県今帰仁村歴史資料館（歴史文化センター）準備室

1993 『なきじん研究 3 今帰仁の歴史』 今帰仁村教育委員会歴史資料館準備室

沖縄県今帰仁村歴史文化センター

1995 『なきじん研究 5 今帰仁の歴史と文化（展示案内）』 今帰仁村教育委員会
本部町史編集委員会

1994 『本部町史 通史編 上』 本部町

國頭郡教育部會

1919 『沖縄縣國頭郡志』 沖縄出版会（1956再版）

崎山誌編集委員会

1989 『崎山誌』 今帰仁村字崎山公民館

瀬底誌編集委員会

1995 『瀬底誌』 本部町字瀬底

仲田 栄松 編

1984 『備瀬史』 ロマン書房（宜野湾市）

名護市青年エイサー祭り実行委員会

1995 「第7回名護市青年エイサー祭り」 名護市青年エイサー祭り実行委員会

池宮 正治

1990 『沖縄の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー—』 ひるぎ社（那覇市）

伊藤 真理

1993 「沖縄県今帰仁村（仲宗根・玉城）の七月エイサー—音楽資料化と伝承過程の考察」 同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業論文

金城 厚 研究代表

1994 『南西諸島の音楽芸能における文化複合の総合的研究—平成5年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書』沖縄県立芸術大学

小林 幸男

1986 「沖縄本島女エイサーの音階」

『諸民族の音 — 小泉文夫先生追悼論文集』音楽之友社

小林 幸男

1991 「沖縄本島北部の女エイサーの歌唱様式」『民俗音楽』10号 日本民俗音楽学会

中山 盛茂, 富村真演, 宮城栄昌

1990 『のろ調査資料』ボーダーインク(那覇市)

日本放送協会 編

1990 『日本民謡大観(沖縄・奄美) III 沖縄諸島篇』日本放送出版協会

外間 守善 他

1980 『南島歌謡大成 沖縄編 下』角川書店

資料編

楽譜について

- ・歌の旋律を中心に考察するため、今回の資料化では三線パートは省略した。
- ・実音よりほぼオクターヴ（今泊）乃至長7度高く（兼次・崎山）ト音記号で記した。
- ・同系旋律を比較するために、同系旋律がある曲は今泊・兼次の順に比較譜にした。
- ・採譜は小林公江が先ず行い、小林幸男がそれを校閲した。

歌詞について

- ・歌詞資料は、実況録音や字の保存用演唱録音を基に小林公江が作成したが、古老の話や各字の資料（今泊青年団協議会『七月エイサー』、兼次青年会の刷り物、『崎山誌』）も参考にした。
- ・共通語訳（* 印の行）は、地元の方の話を参考に、小林幸男が作成した。殆ど歌詞内容が同じ場合は、先に載せたものの訳で代表させ、以後は省略した。
- ・囃し詞は片仮名で、歌詞の本体に当たる部分は平仮名で表記した。
- ・〈 〉は、踊り手の演唱を示した。
- ・[] は、直前の歌詞あるいは囃し詞の、別の表現を示した。
- ・{ } は、音数を整えるために反復した語句を示した。
- ・※ は、歌詞以外のコメントを示した。

録音・録画資料

収録者： 幸……小林 幸男 公……小林 公江
伊……伊藤 真理 久……久万田 晋

[録画] …… DAT による同時録音もあり。[()] は、弾き手の生年。

今泊 1993,9, 1 親泊公民館庭

七月エイサー 実況 [今泊青年会] [宮里正男 (1929)]

[上間巽 (1945), 上間辰実 (1945)]

収録者：幸、公、伊、久 CANON A1MK2, SONY 120HMP (Hi8)

1994,8,22 元家庭～城入口～光風会病院庭～和光園2階（4回収録）

七月エイサー 実況 [同上]

収録者：幸、公 KYOCERA KX-H6, FUJI 120HMP (Hi8)

- 兼次 1993, 8, 27 & 8.31 兼次公民館庭
 七月エイサー 練習 [兼次青年会] [玉城喜久雄 (1931) Tape]
 収録者：幸、公、伊 CANON A1MK2, SONY 120MP (8mm)
- 1994, 8, 22 兼次のあじまあ 2ヶ所 (第2日目の家回りの一部)
 七月エイサー 実況 [同上]
 収録者：幸、公 KYOCERA KX-H6, FUJI 120HMP (Hi8)
- 崎山 1994, 8, 22 崎山あさぎ庭 (5回収録)
 七月エイサー 実況 [崎山消防団, 同婦人会, 同老人会]
 [上間肇 (1948), 玉城幸勝 (1956)]
 収録者：幸、公 KYOCERA KX-H6, FUJI 120HMP (Hi8)
- [録音] ……録画と同内容は省略。同時録音 SONY TCD-D7 (DAT), ECM959A,
- 今泊 1994. 2.21 上間精光宅
 エイサーについて [宮里正男 (1929), 玉城毅 (1930) ほか]
 収録者：幸 SONY TCD-D7 (DAT), ECM959A,
- 兼次 1993. 8.26 Copy (マザーは1992録音)
 エイサー演唱 [玉城喜久雄 (1931) ほか]
1993. 8.27 兼次公民館
 エイサーについて [玉城鎮夫 (1911), 玉城喜久雄]
 収録者：幸、公、伊 SONY TCD-D7 (DAT), ECM959A,
1993. 8.28 & 8.31 玉城鎮夫宅
 エイサーについて [玉城鎮夫]
 収録者：幸、公、伊 SONY TCD-D7 (DAT), ECM959A,
- 崎山 1993. 3.21 Copy
 エイサー演唱 [上間仁正 (1912) ほか]
1993. 3.20 上間仁正宅
 エイサーについて [上間仁正]
 収録者：幸、公 SONY TCD-D3 (DAT), ECM939LT,
1994. 2.22 上間仁正宅
 エイサーについて [上間仁正]
 収録者：幸 SONY TCD-D3 (DAT), ECM939LT,

今泊エイサーの歌詞

めぐ 巡りば二合 ^{にんごう} くでいちゃでいちゃ ^{どしどし} 同土部

* 巡れば（焼酎を）二合（ずつ頂戴できるぞ）、くいざいざ仲間達

1. 弥陀よ弥陀よ 仏

くエイサー サーエイサー イヤウリサーサー スリサーサー イヤササ

^{しちがつ} 七月になりば ^{みちや} みちや ^{ぶとうき} 仏 ^{かざ} ん飾てい

くエイサー サーエイサー イヤウリサーサー スリサーサー イヤササ

* 弥陀よ弥陀仏 [池宮 1990:186]。盂蘭盆になったので、土の仏を飾って

2. 此まぬはんし前や 御肝 [ぬ] 良たさぬ く被てい巡やびら

サブエイ [サブエン] サブエイ [サブエン] サーサブエイ [サブエン]

くピーラルラー ラーラルラー ^{ニンゴウ} 二合ドーヤ二合ドーヤ ^{サキ} 酒二合 ^{イツショ} 一升二合チェチェ

^{いちごう} 一合がうたびみせーら ^{にんごう} 二合がうたびみせーら く被てい巡やびら く同前

* ここのお婆様はお心が宜しい。く押し戴イテ廻りマショウ。ピーラルラー ラーラルラー（笛か哨唢の音）。

二合ダヨ、二合ダヨ、焼酎二合、一升二合。一合賜られますか、二合賜られますか。く以下同

3. 今年前田る [ぬ] 稲めんそーち くスリスリ 目出度イ 今年飲まぬ酒 な何時飲みが

くユティカラクヌ ^{チャーヌ} 達飲マンカナ 飲ディ遊バナ チェチェ

^{はる} 畑ぬ窪溜まい ^{あみふ} 雨降りば溜まる くスリスリ 目出度イ 降らなていん溜まる 此まぬ殿内 ^く ^{とうぬち} 同前

* 今年の前の田の稲をご覧なさい（または、稲がいらっしゃって）。くソレソレ目出度イ

今年酒を飲まずして、一体いつ飲むというのか？ くダカラ皆ノ衆、飲マナイカネ。飲ンテ遊ボウヤ

* 畑の窪溜まりは、雨が降れば溜まる。降らなくても（福が）溜まるのは、ここのお屋敷。

4. サー イ [ヒ] ヤヌガ ヘイ くササ イ [ヒ] ヤヌガヘイ

^{なちじん} 今帰仁ぬ ^{ぐしく} 城 ヨンサー ^{しむない} 霜成ぬ ^く 九年母 ^{くにぶ} くサー イヤヌガヘイ ササ イヤヌガヘイ

^{しぢまうとうだる} 志慶真乙樽が ヨンサー ^ぬ 貫ちやい ^は 佩ちや {佩ちや} い く同前

* 今帰仁の城、末成りの蜜柑。志慶真村（現今帰仁村諸志）の乙樽（女の名）が、首に通したり掛けたり。（……今帰仁王子の伝説による。）

5. 気張^{ちば}てい呉^くいりよー うないぬ^{ちゅー}達^ちひ [ち] ちゅま^し摺^していかみらさや

〈稲^{イニシ}摺^リ摺^リ 米^{クミユ}選^リ選^リ イヤササ ウリササ〉

なんぢ^なが^がま^ます^く く^くが^がに^にび^いい
南^{なん}鐮^ぢ釜^が作^まて^すい 黄^く金^が鍋^に居^いして^い 〈同前〉

* 頑張ってくれよ、姉妹達。初穂を摺って捧げ持たせるぞ。〈稲ヲ摺レ摺レ、米ヲ選レ選レ〉

* 銀の釜を作って、金の鍋を据えて、〈稲ヲ摺レ摺レ、米ヲ選レ選レ〉

6. 九^く年^ね母^ぼん木^ぎぬ下^{しちや}うていヨ スリ 布^{ぬま}巻^まちゆる^{いなぐ}女子

〈スリ あんち [し] ん清^{ちゆ}らさがやー 大^て概^げあんてー〉

ありあば {あば} 小^こヨ スリ 年^{とし}や幾^{いく}ち成^なたが 〈スリ 十^{じゅう}七^{しち}八^{はち}やがやー 吾^わねー三十〉

* 蜜柑の木の下で、布を巻く (=機を織る) 娘。〈「何テ美シインダ。」「ソコソコダッテ。」〉

おい、姐さん、年は幾つになったかい? 〈多分十七八カネエ。私ハ三十。〉

7. 東^{あがりあか}明^{しみなれ}がりば墨^い習^ちえが行^ちちゆい チ [ヒ] ール^{チー}ヒーヤヌ 〈大将^{テーゾー}ハンジン〉

何^なガ^が夕^ゆ辺^べ来^きタル 〈雨^{アメ}降^フティ来^きタルサ サヨサヨサヨサイ〉

船^{ふね}や繩^{ちなと}取^とりば んぞ^{すでいひ}や袖^{そで}引^ひちゆい チール^{チー}ヒーヤヌ 〈大将^{テーゾー}ハンジン〉

上^{うい}間^まヌ^な嫡^{ちやく}子^しヤ 〈謝^{しゃ}花^{はな}ヌ^なタン^{たん}ピョウ サヨサヨサヨサイ〉

* 東が明るくなったので勉強に行く。〈(不詳)〉 何テ夕辺、米ナカッタダ。〈雨ガ降ッテ米ナカッタノ〉

* 船の綱を取ると (=いよいよ出帆となると)、彼女は (僕の) 袖を引く。上間ノ嫡子ハ 〈謝花ノ不器用者〉

8. テン^{てん}ヨー^{てん}ヨー シト [タ] リク [トゥ] テン^{てん}ササ ハ [ア] ー^りリ^りヨー^アヌ^ユー^イヤナ 〈イヤササ〉

嘉^か例^り吉^{ゆし}ぬ遊^{あし}び 打^{うち}ち晴^はりていからや

〈テン^{てん}ヨー^{てん}ヨー シト^りク^{てん}ササ〉 ハ [ア] ー^りリ^りヨー^アヌ ユー^イヤナ 〈イヤササ〉

夜^ゆぬ明^あきてい太^{たい}陽^だぬヨ 上^あがらわん良^りたさ 〈同前〉

* 日出度い祝いの遊びに打ち解けたからには、夜が明けて太陽が上がらなくても良いよ。

9. エー ヤング^{やんぐ}ワソイソイ 〈ヤング^{やんぐ}ワソイソイ〉

ヤング^{やんぐ}ワソイソイよ 誰^たが^がし始^はみたが

〈イル^いサー^さスラ [ナ] ー ユイ^{うい}ヨー〉 ヘー^いスー^りリ 〈ヤング^{やんぐ}ワソイソイ〉

* 《ヤングワソイソイ》は、誰が始めたのか?

10. 谷茶前ぬ浜にヨ すりる小が寄てい来よーたんなーへイ

〈すりる小が寄てい来よーたんなーへイ〉 ヤングワソイソイ 〈イヤングワソイソイ〉

※ この後「大和みじゅん」の歌詞もあったが、今は歌わない。

* 「谷茶（恩納村谷茶）前の浜に、キビナゴが寄って来ているって。」

11. 加那ヨー シーシ 〈イヤイヤ シーシ〉

加那ヨー 思影ぬ立ていばヨー加那ヨー 〈加那ヨートウ ヨー加那ヨーサイヨサイヨサイヨサイ〉

宿に居りらぬ 〈ハルヨーンゾヨー 加那一ヨー シーシ〉

* 愛シイ人ヨ 姿が思い浮かぶと 愛シイ人ヨ 家にじっとしてられない。

12. 今すゆる歌や 聴ちえる覚いあしが 〈イーマデンスナー ヌヤリヤリ〉

確か中道ぬ かまれーやら筈どー 〈スーリデンスナー ヌヤリヤリ〉

* 今やっている歌は、聴き覚えがあるけど。きっと中道のカマレー（女の名）に違いないよ。

13. 汀間とう安部境ぬ 川ぬ下ぬ浜下りてい 汀間とう 〈丸目加那とう 請人神谷が〉 恋ぬ話

〈サー リカチャンナーヤー 丸目加那〉

* 汀間と安部（現名護市汀間と安部）の境のカヌチャ浜に下りて、汀間の丸目加那と請人の神谷の恋の話。

〈サァ、ウマクイッタカネエ、丸目加那〉

14. 渡久地港に ささ入りてい ささ入りてい 渡久地二才達や でいかちやーしが

〈サーサ 浜元二才達や なし戻い カマヤシナー スリ カマヤシナー カマヤシナ ヤッサイ〉

* 渡久地（現本部町渡久地）港に（魚獲りのため）毒草を入れて、渡久地の青年達はうまいったが、浜元（現本部町浜元）の青年達は手ぶらで戻り。

15. だんこ節習ゆんでい 名護東江通ていヨンサー 〈通る道中に ちんしけ一割てい [けーかち割てい]〉

ダンコヨーダンコ 〈スリヤリクヌ イヤササ [ヤッサイ]〉

女童に惚りて具志堅村通ていヨンサー 〈以下同前〉

※ [ヤッサイ] [けーかち割てい] は、故老の演唱による。

* だんこ節を習うと言って名護の東江（現名護市東江）に通って、〈通う途中で（石垣で）膝をかち割って。

* 娘に惚れて、具志堅村（現本部町具志堅）に通って、〈同前〉

16. 国頭岬^{くんぢやんきち}から 雨降^{あみふ}らち 与論^{ゆんぬ}永良部^{いらぶ}や 霧^{ちり}にどう [霧ぬ] かかゆんどー
 く下^{シチャワク}腑^フドゥッサイ チナヌヘイヘイ 島^{シマ}ヌヘイヘイ ヘッヘイ
 海^{うみ}ぬさし草^{くさ} 靡^{なび}ちぬ清^{ちゆ}らさ ※ [海ぬさし草や あん清らさあむぬ] と歌われたこともある。
 くイヤートゥ吾^{わが}ントゥヤ アンシーナリカナ 島^{シマ}ヌヘイヘイ ヘッヘイ
 ※ この他にくひちぬ先^{さき}々 危^{あや}なさや 仕度^{しど}ヌ悪^{あく}サヤ 側^{わき}ナリナリ……) もあった。
 * 辺戸岬 (国頭村) から雨を降らせて、与論島や沖永良部島は霧がかかるぞ。
 * 海のサシ草は靡くのが美しい。(※海のサシ草はあんなに美しいのに、) オ前^{まへ}ト私^{わたし}トハソ^はソ^のナニナリ…。
17. 仲門^{なかつら}へい 仲門^{なかつら}へい 遊び^{あし}しが行^いか^かに 仲門^{なかつら}へい く遊び^{あし}しが行^いか^かに 仲門^{なかつら}へい イヤイヤシーシ
 遊び^{あし}しが行^いきば女^い三人^{なみ} 男^おさら吾^{わが}ん一人^{ひとり} く女^い三人^{なみ} 男^おさら吾^{わが}ん一人^{ひとり} イヤイヤシーシ
 * 「仲門兄さん。」「仲門兄さん。」「遊びしに行こうよ、仲門兄さん。」
 「遊びしに行ったらば、女三人に男がたった俺一人。」
18. 蔓^{かん}葉^{だば} や茹^ゆでいていヨ^よンサ 蔓^{かん}葉^{だば} や茹^ゆでいてい くイ^いラヨ スー^{すー}リエイサー イ^いランコサビラ
 く島^{シマ}歌^{うた}三^{さん}線^{せん} [三^{さん}線^{せん}] 仲^な宗^{そう}根^ねブ^ぶクヌ く白^{しろ}玉^{たま}清^{きよ}ラサヤ リ^りヒヤリリ イヤササ
 ※ 「リヒヤリリ」は「リヒヤ [アッティアッティ]」のことも
 * 薩^{さつ}摩^ま芋^{うも}の蔓^{くわ}を茹^ゆで、薩^{さつ}摩^ま芋^{うも}の蔓^{くわ}を茹^ゆで、イ^いランコ (?) シマショウ。く島^{シマ}うた三^{さん}線^{せん}
 仲^な宗^{そう}根^ねノ田^{でん}圃^ぼハ、白^{しろ}玉^{たま} (稲^{いね}の実^みった様^{よう}) ガ綺^き麗^れダネエ。
19. 忍^{しの}び門^{もん}やあしが 隠^{かく}り門^{もん}や無^ねらぬ ヤリクヌ アキヨ吾^{わが}ガ思^しドゥ 中^{なか}ヌアサギ くハラユイユイ
 親^{おや}泊^{とまり}女^{むすめ}童^{どう}ぬ 色^{いろ}清^{きよ}らさ無^ねらぬ ヤリクヌ アキヨ吾^{わが}ガ思^しドゥ 中^{なか}ヌアサギ くハラユイユイ
 ※ この歌詞は昔は、やっていなかったという。
 * 忍^{しの}び門^{もん}はあるが隠^{かく}れ門^{もん}はない。アァ私^{わたし}ノ思^しウ人^{ひと}コソハ中^{なか}ノアサギ。親^{おや}泊^{とまり}の娘^{むすめ}の顔^{かほ}色^{いろ}の美^{うつく}しいのは、いない。
20. サーサー 世^よ願^{ねが}えさびら くウネササ
 弥^{みろく}勒^{りやく}世^よぬ世^よ果^{くわ}報^{ほう} 親^{おや}泊^{とまり}にいもち 作^しいむ作^しいぬ 御^ご願^{ねが}えさびら 御^ご願^{ねが}えさびら
 くサーサー 御^ご願^{ねが}えさびら ウネササ
 親^{おや}泊^{とまり}ぬ稲^{いね}や 菖^{せう}蒲^ぼぬ葉^はぬ如^{ごと}に 満^{まん}作^{さく}世^よ願^{ねが}てい 御^ご初^{はつ}上^あぎら 御^ご初^{はつ}上^あぎら
 くサーサー 御^ご初^{はつ}上^あぎらウネササ
 白^{しら}髪^{かみ}御^ご年^{とし}寄^よや 床^{とこ}ぬ前^{まへ}に飾^{かざ}てい 産^うし小^こ歌^{うた}しみてい 孫^{まが}舞^め方^{かた} 孫^{まが}舞^め方^{かた}

〈サーサー 孫舞方 ウネササ〉

- * 豊作祈願をしましょう。弥勒の世の豊年が親泊にいらっしゃって、農作物の豊作祈願をしましょう。
- * 親泊の稲は菖蒲の葉のように（真っ直ぐ生え揃って）、万作を願って、初穂を（神様に）上げよう。
- * 白髪のお年寄り、床の間の前に飾って、子供に歌をさせて、孫が踊る役。

※ 以上の他に、以前は《海やからー》《スリ東》も行われた。また、エイサーを始めるときには「此まから来んでいいみしえーたん スリサーサー エイスリサーサー ヒヤユリサーサー」と歌った。

兼次エイサーの歌詞

1. スリサーサー 〈スリサーサー〉 スリサーサー 〈エイサーサー ヒヤウリサーサー〉
しちぐワち ふあちぐワち
 七月 や八月 や ぶとっけみちや 仏ん飾てい
 〈エイサー サーエイサー ヒヤウリサーサー スーリサーサー (イヤササ)〉
やま すだ
 ウネマタ 山に育ちやる がらし山ゆ 烏 〈同前〉
2. あがり ぞー ぎざち ゆだむ ちゅ
 東ん門ぬ月橋 枝持ちぬ清らさ
 〈テンヨーテンヨー バーチーチパチ連リタン サッサイ ハーリヨーイヌ ヨーイヤナ〉
しちや とー
 うりが下うとてい あし でいき遊び出来らさや 〈同前〉
 * 東の門の月橋（植物名）、枝振りが美しい。 〈テンヨー、テンヨー、叔母ヲ同伴シタ。……〉
 その下で遊びをやりたいものだね。 〈同前〉
3. イニシ クミユ
 稲摺り摺り 米選り選り イヤササ ウリササ
くとうしういー
 今年植いてーる [植いたる] いに あぶし稲やヨ 畦 {畦} まくら枕
 〈稲摺り摺り 米選り選り イヤササ ウリササ (イヤササ ッハッハ)〉
あわ ゆ
 粟ぬ選らりゆみ くみ米ぬどう選らりゆさ 〈同前〉
 * 稲ヲ摺レ摺レ、米ヲ選レ選レ。今年植えてある稲は（たわわで）畦を枕。〈稲ヲ摺レ摺レ、米ヲ選レ選レ〉
 * 粟を選られようか。米をこそ選ることができるのだ。 〈稲ヲ摺レ摺レ、米ヲ選レ選レ〉
4. くるしま なわー
 黒鳥ぬ習えやヨー 〈サーサ〉 あし遊び習えでむぬヨー でーサーサ祝イヌ 〈サースリ ユ世バ稔レ〉
かり ゆし
 嘉例吉ぬ遊びヨー 〈サーサ〉 打ち晴りていからやヨー イワサーサ祝イヌ 〈サースリ ユ世バ稔レ〉

* 黒島（八重山諸島の島名）の習わしは、遊びの習わしだから。サアサ、祝イノ〈サアソレ 豊年満作〉

5. ヨイシュラヨ イワイヌネ ウネ イワイヌネ ウネ ^{アシフ}遊欲サヤ

〈シュラヨイヨイシュラヨ イワイヌネ ウネ イワイヌネ ウネ 遊欲サヤ（イヤササ ッハッハ）〉

弥^{みるくゆー}勒^{たぼー}世や給ち 〈(ヤササ)〉 遊びわん遊び ^{うどろ}踊らわん踊り ウネ 遊欲さや

〈シュラヨイヨイシュラヨ イワイヌネ ウネ イワイヌネ ウネ 遊欲サヤ（イヤササ ッハッハ）〉

嘉例吉ぬ遊び 打ち晴りていからや 夜^ゆぬ明^あきてい太陽^{ていだ}ぬ ウネ上がる迄^{までい}ん 〈同前〉

弥勒世や給ち 遊ぶわん踊り 手足^{ていあしな}並み揃^{する}てい ウネ 遊欲さや 〈同前〉

シュラヨイヨイシュラヨ イワイヌネ ウネ イワイヌネ ウネ 遊欲サヤ

※ イワイヌネは、イワイルデと言う場合もある。

* 弥勒の世（豊年）をば下さって、遊ばば遊べ、踊らば踊れ。ソレ、遊びたや。 *（前出）

* 弥勒の世をば下さって、遊ばば踊れ。手並み足並み揃って、ソレ、遊びたや。

6. サー ^{な きじん よ}今^{とこ}帰仁良い処 一度はおいで 〈サーユイユイ〉 西^{ほくざん}は北山 東^{うんてんこう}は運天港

〈マタ ハーリヌ チンダラ 愛シャーマヨ〉

サー 田^{たぎきと}草取^{いぎよい}るなら 十六夜月夜 〈サーユイユイ〉 二人^{ふたり}で気兼ねも ヤレホニ水入らず 〈同前〉

7. 飛^{とろ}び立ちゆる^{はべる}蝶 スリスリヌ 〈スリスリヌ〉 ^{あやはべる}綾蝶

〈スーリサーサー スラヤサ ハイヤ イチュイチュチュイ〉

先^まちゆ待てい蝶 スリスリヌ 〈スリスリヌ〉 先^ちちゆ待てい連りら 〈同前〉

※ 先^まちゆ待てい蝶 花^{むとう}ぬ元 知らん ^{あがり}東^んうち向かてい 飛び立ちゆる蝶

〈スーリサーサー スラヤサ ハイヤ イクイクイクイ〉

※ 以前に歌われていた歌詞……玉城鎮夫氏による。

* 飛び立つ蝶々、綺麗な蝶々。一寸と待て蝶々、一寸と待て一緒に行こう。

* ※一寸と待て蝶々、花の元知らぬ。東に向かって飛び立つ蝶々。

8. 兼^{かに}次^し板^{いた}干^び瀬^しに 打^{うち}ちやい引^ひく波^{なみ}ぬヨ 〈兼^{みやらび}次^み女^め童^{どう}ぬ〉 美^み笑^わ齒^は口^{ぐち} 〈兼^{ちよ}次^じ女^め童^{どう} アン清^{ちよ}ラサガヤー〉

初^{はじ}みていどうやしが んぞや此^こぬ村^{むら}よ 〈女^め童^{どう}がやゆい〉 色^{いろ}きさ清^{ちよ}らさる

〈^{シバ}暫^クシ^ウ此^ウマ居^{カク}テ^{トッ}ィ 語^{カク}テ^{トッ}ィ取^{トッ}ラセー〉

* 兼次のリーフに寄せては引く波の（横に並んだ白い様は）〈兼次の娘の〉微笑む口元のよう。

〈兼次ノ娘ハ何ト美シイコトカ!〉

* 初めて（会うの）ではあるが、彼女はこの村の〈娘だろうか?〉 顔色の美しいこと。

〈暫クココデ、（僕ト）話シヲシテオクレ。〉

9. 九年母ん木ぬ下うてい ヨースリ 布まちゆる女

〈スリ あんちん清らさがや 大概あんてー [あんしえー]〉

へいあば小 あば小 ヨースリ 年幾ち成とーが 〈スリ 十七八やら筈 吾ねー三十〉

10. ヤー 姉小 ソイソイ リヒヤングワソイソイ

姉小 タマサヤ 村ヌ下 ウティ イサソイソイソイ

谷茶前ぬ浜に するる小が寄てい来よんでいさなー へい

〈するる小が 寄てい来よんでいさなーへい 谷茶マシマシ ヤン小 ソイソイ〉

するる小やあらぬヨ 大和大和みずんでいさなー へい

〈大和大和みずんでいさなーへい 谷茶マシマシ ヤン小 ソイソイ〉

* (前出) * キビナゴではないよ。カタクチイワシだそうだ。

11. 蔓葉や茹でいていヨンサー 蔓葉や茹でいてい 〈イヤヨー スーリサーへい〉 だんくさびら

〈島歌三線〉 遊ビヌ清ラサヤ 〈人数ヌ備ワイ リヒヤアッティ アッティ アッティ〉

からす小やかきていヨンサー からす小やかきてい 〈イヤヨー スーリサーへい〉 だんくさびら

〈島歌三線〉 仲宗根ブックヤ 〈訛イヌ清ラサヌ リヒヤアッティ アッティ アッティ〉

* (前出) 〈島うた三線〉 遊ビガ美シイノハ 〈人数ガ揃ッテノコト〉。

* 小魚の塩辛をかけて、小魚の塩辛をかけて、ダンコ (?) シマショウ。 仲宗根ノムラハ、訛ガ綺麗。

12. ヨーテー 差し垣ぬ上にヨーテー 〈差し垣ぬ上に〉 なべら花咲かちヨ 〈ウネ シクテントゥテン〉

ヨーテー うりが実成らばヨーテー 〈うりが実成らば〉 兄小 にちん持てい えーさなや 〈同前〉

* 差し垣の上に、へチマの花を咲かせて、

その実が実ったら、兄さん（彼）にひょいと持って行って、差し上げよう。

13. あぬ杜ぬ二中 煙小 ぬ立ちゆさ 〈煙小ぬ立ちゆさ〉

確か吾が親ぬ煙草煙 〈サヨンサ ヨンサ ヨンサ ヨンサ サヌイヤサノサ〉

いづみふるが づつ 伊豆味古嘉津宇や ^{むい ひじや とー} 杜どう 隔みとさ ^{とー} 杜どう 隔みとさ ^{くとうば} 言葉変わらす ^{ぬ は} 伊野波 ^{まん な} と満名 ^{く 同前}

* あの山の間、煙が上がっているよ。きっと、私の父さんの煙草の煙。

* 伊豆味と古嘉津宇（ともに現本部町の字の名）は、山でこそ隔てられている。

言葉（方言）が変わるのは伊野波（現本部町伊野波）と満名（現本部町並里）。

14. ^{きとう} 里が張 ^は てい ^{く いーてー} 呉 ^{むん} いてる ^{かき} 麦 ^{かん} じゅる ^{しだ} ぬ ^{いん} 笠 ^や ^{く 被} し ^{わん} ん ^涼 さ ^縁 が ^や たら

^{はなず} 花 ^{てい} 染 ^さ み ^な ぬ ^す 手 ^か 巾 ^な 誰 ^が 染 ^み て ^い 呉 ^{いた} が ^{く 愛} し ^{うん} ぞ ^が 染 ^み て ^い 呉 ^{いた} せ

* あの人が張ってくれた麦藁の笠は、く被っても涼しい。（これも二人の）縁の故だろうか。

* 花染めの手拭いは、誰が染めてくれたのか？ くいとしい彼女が染めてくれたのだ。

15. ウネ シタリヌヨー ウネ シトゥリトウテン ^{く ハリ} ササ ^{ッハ} ッハ ^{ッハ} ッハ

くウネ シタリヌヨー ウネ シトゥリトウテン ^{ハリ} ササ ^{ッハ} ッハ ^{ッハ} ッハ

サヨサー ^き 今日 ^ゆ ぬ ^ゆ 良 ^ゆ かる ^ゆ 日に ^{ゆーにげー} 世 ^く 願 ^{むらむと} え ^ぬ ゆ ^{スリ} す ^{きか} し ^{うにげー} や ^此 ま ^ぬ 村 ^元 ぬ ^{スリ} 栄 ^い 御 ^願 え

くウネ シタリヌヨー ウネ シトゥリトウテン ^{ハリ} ササ ^{ッハ} ッハ ^{ッハ} ッハ

サヨサー ^{しら} 白 ^ぎ 髪 ^と 年 ^{しゆ} 寄 ^い や ^と 床 ^め ぬ ^め 前 ^に 飾 ^て い ^な 産 ^{ぐワ-} し ^小 歌 ^し み ^て い ^{スリ} 孫 ^ま 舞 ^が 方 ^{かた} ^{く 同前}

サヨサー ^{くとう} 今 ^し 年 ^さ 申 ^{とし} 年 ^に ^世 願 ^え ゆ ^す し ^や ^明 き ^て い ^と 酉 ^{とし} 年 ^ぬ ^{スリ} 世 ^が 果 ^ふ 報 ^御 願 ^え ^{く 同前}

※ 年によって干支は変わる。

16. ^{くる} 十七 ^{ゆう} 八 ^{まん} 頃 ^{ぐい} や ^ゆ 夕 ^ゆ 間 ^た 暮 ^{ぼ-} どう ^わ 待 ^じ ち ^{ゆう} ゆる ^ヨ ^夜 ん ^幕 り ^て い ^給 り ^吾 自 ^由 さ ^び ば ^ら

くサ ^ラ ド ^ン ド ^ン セー ^ウ ネ ^ハ ャー ^{ワッ} 吾 ^ッ 達 ^ン ^カ ン ^チ ル ^ミ 巡 ^ユ サ

* 十七八の頃は、夕まぐれをこそ待つ。夜も暮れておくれ、自分の思いのまま楽しみましょう。

※ 現在は行われていないが、玉城鎮夫氏によって思い出された歌詞を以下に記しておく。

く ^{く-} 此 ^{ゆーにげ-} ま ^え から ^さ 来 ^び ん ^ら で ^い ^い み ^し え ^ー た ^ん ^世 願 ^え さ ^び ば ^ら

く ^し 此 ^{め-} ま ^ち ぬ ^む は ^む ん ^ち し ^ゆ 前 ^め や ^肝 持 ^ち ぬ ^良 た ^さ ぬ ^被 て ^い ^巡 や ^び ば ^ら ^サ ウ ^エ ン ^サ ウ ^エ ン ^サ ー ^サ ウ ^エ ン

ピ ^ラ ル ^ラ ー ^ラ ー ^ラ ル ^ラ ー ^ニ 合 ^ド ー ^ヤ ^ニ 合 ^ド ー ^ヤ ^酒 二 ^合 ^一 升 ^二 合 ^チ チ ^エ

* ここから来いとおっしゃいました（ので入らせて載します）。豊作祈願をしましょう。（以下、前出）

《久高》

くだかまんじゆすー ちゆ ゆーべー
久高万寿主や 清ら 妾 かめーていていんどー ヨー玉黄金
クユイ ハナン クームツ
今宵又 話 又面白サー スリサーサー エイスリサーサー スリ

* 久高万寿主（男の名）は別嬪のお妾を探しているってよ、イトシイ子。今宵ノ話ハ面白イネエ。

《今帰仁節》

なちじん ぐしく
今帰仁ぬ 城 ヨンサー 霜成ぬ九年母 サー ヒヤルガヘイササ ヒヤルガヘイ
しぢ まうとうだる
志慶真乙樽が ヨンサー 貫ちやい佩ちや {佩ちや} い サー ヒヤルガヘイササ ヒヤルガヘイ

《海やからー》

うみ
海やからーに惚りてい あぬがまに泊てい 殺さりがしゆら 骨が脱ちゆら
ウミ
海ヤカラー ドンドン スリハイスーリ マタ ハイスーリ

海やからーに惚りてい かむる物かまん

* 海やからー（漂着したイギリス船員）に惚れて、あの（船員の住む）洞窟に泊まって。殺される
だろうか、骨が外れるだろうか。海ヤカラー、ロンドン。

* 海やからーに惚れて、食べるものも食べない。

《唐船どーい》

とーしん
唐船どーいさんてーまん 一散走えーならんしや ユーイナサ
わかさまちむら
若狭町村ぬ サー 瀬名波ぬたん前 ハイヤセンスル ユーイヤナ

* 唐船だぞーと言っても、一目散に走らないのは、若狭町村（現那覇市若狭）の瀬名波（屋号）の
お爺さん。

《健堅辺名地》……この曲で本調子の曲を締め括った。

きんきんひ なぢ かーらひじや あわ
健堅辺名地や 川原隔みてい 哀りすらどーや

* 健堅（現本部町健堅）と辺名地（現本部町辺名地）とは、川を隔てて（行き交うのに）難儀するだろうね。

《越来節》

ぐいーく まぢり
越来ヨ間切に あている事 文子富里が せる事や ユヤーサ せる事や イサソイソイソイ
みやらび
女童やがまや とうん巡てい 女童三人居るうちに ユヤーサ 居るうちに

すりから愛^{かな}さし 呼^ゆび出^{んぢゃ}ち でいちゃでいちゃ女童^{あし} 遊び^{あし}かい ユヤーサ 遊び^{あし}かい

- * 越来間切（現沖縄市の北の部分）にあったこと。書記の富里（男の名）がしたことには、娘宿を廻って、娘が三人座っている中で、それから可愛い子と呼び出して、「さあさあ彼女、遊びに（行こうぜ。）」

《鳩間節》……3～4年間踊った。

鳩^{ほと}間^ま中^{なか}杜^{かむり} 走^はり上^{ぬぶ}てい シタリガヨイ くばぬ^{しち*}下^{しち*}に 走^はり上^{ぬぶ}てい

南^{ハイ}ヤヨ^{グキ}ーティ^{チー}バ^{トウ} カイ岳^{マサ} 手^{ミグト}取^ト ユル デンヨ^{マサ}ー 勝^{マサ}ティ^{ミグト}見^{ミグト}事^ト

- * 鳩間（八重山諸島の島名）の中杜に走り上って、檳榔の下に走り上って。

南ハト言ウト、（西表島の）古見岳ガ手ニ取ルヨウテ、勝ッテ見事。

《だんじゅ嘉例吉》

だんじゅ嘉^{かり}例^{ゆし}吉^{ふに}ぬ 船^{ふに}ぬ綱^{ちなと}取^{ちなと}りば 走^ハりヨ^{フニ}船^ユヨ 良^ハウ走^ハイセー ナンチャ良^ハウ走^ハイセ

船^{ふに}ぬ綱^{ちなと}取^{ちなと}りば 風^{かじ}や 風^まや真^ま鱸^と 走^ハりヨ^{フニ}船^ユヨ 良^ハウ走^ハイセー ナンチャ良^ハウ走^ハイセ

ササ 良^ハウ走^ハイセ 走^ハりヨ^{フニ}船^ユヨ

《カマヤシナー》

首^{すい}里^ちから来^{かま}よーしが かま^{かま}いち^{かま}ゆた かま^{かま}いち^{かま}ゆた かま^{かま}や御^{かま}客^{かま}と^{かま}う 出^{かま}ち^{かま}や^{かま}び^{かま}たん

サ^さー 何^い時^{ちん}出^いち^{ちん}た^いが 今^な先^まど^さー 波^な之^ん上^{みん}毛^も

首^ス里^イカマ^スヤシ^イナー カマ^スヤシ^イナー ヤサ ハイヤ ウリウリ

- * 新客「首里から来ておるのだが、カマ（遊女の名）を暫し、暫し。」 女将「カマはお客様と出かけました。」

新客「何時でかけたと？」 女将「たった今しがた、波之上（現那覇市波之上）の原（へ）。」

《だんく節》

だんく節^{ぶしなら}習^{ぶしなら}ゆ^{ぶしなら}んでい 名^な護^ぐ山^{やま}に通^{かゆ}てい ヨンサ^{かゆ}ー

通^{かゆ}る道^{みちなか}中^しに ちん^しし^わけ^わー割^わてい ランク^{らんく}ヨ^{らんく}ーラン^{らんく}ク スー^{すー}リヤ^{りや}リク^{りく}ヌ

《仲座兄》

仲^{なか}座^ざ兄^{ひー}や 国^{くん}頭^{ぢゃん}旅^{ぶに}さ 国^く頭^{ぶに}船^うから落^{ひさや}ていてい 足^{ひさや}病^{ひさや}んでい イヤ^{ひさや}イヤ^{ひさや} シー^{ひさや}シ

国^く頭^{ぶに}船^うから落^{ひさや}ていてい 足^{ひさや}病^{ひさや}んでい イヤ^{ひさや}イヤ^{ひさや} シー^{ひさや}シ

仲^な座^ざ兄^{ひー}や 粗^す忽^{くち}な^{むん}者^{むん}や^{むん}さ 南^な蛮^{ぼる}瘡^が出^{さん}ち^{ぢゃ} 弾^{はん}け^{はん}ーら^{はん}ち

仲座兄や 粗忽な者やさ ひーじゃー頭ぬ 七ち下がとーん

- * 仲座の兄さんは国頭の旅で、山原船から落ちて、足を痛めて。
- * 仲座の兄さんは粗忽者だよ。梅毒にかかって、膿が弾けて。
- * 仲座の兄さんは粗忽者だよ。山羊の頭が、七つ（も）下がっている。（……山羊肉が梅毒に効く、という）

《海ぬちん法螺》

海ぬちん法螺小 逆なやい立ていば ひさぬ先々 危なさや 仕度又悪サヤ 側ナリナーリ
 サッ 浮世又真中 ジサジサジッサイ [ドサドサドッサイ] 島又へいへいへへッイ
 海ぬさし草や あん清らさ靡く 吾んや里前に 打ち靡く 仕度又悪サヤ 寄ティ来カン来 <同前>

- * 海のちん法螺（巻貝の一、イトカケヘナタリ）が逆さになって立てば、足の先々が危ない。
 支度ガ悪イネ、側ニ寄レ寄レ。浮世ノ真中……
- * 海のさし草（海草の一）はあんなに綺麗に靡く。私は彼にうち靡く。

《汀間当》

汀間とぅ安部 境ぬ 浜下りてい 汀間ぬ丸目加那とぅ 請人神谷とぅ 恋ぬ話
 サー 本ヌカナーヒャー 誠 カヤー

《汗水節》……1930（昭和5）年頃に踊っていた。仲本稔 作詞、宮良長包 作曲（1928）

あしみじ 汗水ゆ流ち 働ちゆる人ぬ 心嬉しさや 他所ぬ知ゆみ
 他所ぬ知ゆみ ユイヤサーサー 他所ぬ知ゆみ

- * 汗水を流して働く人の心の喜びは、他人にわかりようもない。

《県道節》……昭和初期の流行歌謡

県道道造てい ヨーサー 誰が為ん成ゆが 世間御万人ぬ サー 為になゆさ スリ為ニ成ユサ
 * 県道を造って、誰のためになるのか？ 世間万人のためになるのさ。

- * この他にも歌詞は思い出せないが、《ヌヌ万歳（伊舎堂ん前）》《前田節》《デンスナー》
 《加那ヨー》《赤山》《イルサスナ》《ジントーヨー》などをやった記憶があるという。

崎山エイサーの歌詞

1. 七月^{しちぐわち}や八月^{はちぐわち}や みちや^{ぶとうけ} 仏^{かざ}ん飾^{てい}てい ※ [七月十三 みちや仏ん飾てい……『崎山誌』]

〈エイサー サーエイサー ヒヤウリサーサー スーリサーサー (イヤササ ハイヤ)〉

2. 七月^{にんぶち}念^や仏^{がきかん}破^{もう}り笠^も被^してい 儲^もきしみらなやー シトゥヨーテンヨー 〈同前〉

※ 以後、どの曲の末尾にも〈イヤササ ハイヤ〉が入る。

* お盆の念仏、破れ笠をかぶせて、儲けさせよう。

3. 七月^{みやらび}になりば 女^{そー}童^{しち}ぬいそさ 〈月^{ヒ-}ド一日^{ヒ-}ドー〉

何^{ヌ-}ガ夕^{ユツ}辺^{ビラ}来^{アミ}ンタル 〈雨^{アミ}降^ティ来^ンタン チ ヨサヨサ (ヤササ)〉

* お盆になったので、娘はわくわくする。〈月^グヨ、日^グヨ〉 (以下、前出)

4. 此^くまぬはんし^{しーぬー}前^や 御^{うちむ}肝^ゆぬ良^{かながな}たさぬ 愛^{かながな}々^とう 〈サグエイ サグエイ サーサグエイ〉

〈ピーラルラー ラーラルラー 二^ニ合^ゴドーヤ二^ニ合^ゴドーヤ 酒^{サキ}二^ニ合^ゴ 一^{イツ}升^ス三^ス合^ス チェチェ (イヤササ)〉

一^{いちごう}合^{ごう}がうたびみせーら 二^に合^{ごう}がうたびみせーら 被^{かみ}てい巡^{めぐ}やびら 〈同前〉

5. 東^{あがり}ん門^{ぞー}ぬ月^{きぎーち}橋^{ゆだむ} 枝^{ちゆ}持^ちぬ清^{ちゆ}らさ

〈テンヨーテンヨー シトゥリトゥテンササ ハーリヨーイヌ ユーイヤナ リウリウリ エイサ〉

伊^い集^{じゆ}ぬ木^きぬ花^はや 真^ま白^{しら}花^{はな}咲^さかち 〈同前〉

* (前出) * 伊集の木の花は、真っ白な花を咲かせて。

6. 伊^い舎^さ堂^{どう}ん前^めぬ 三^{さん}本^{ぼん}榕^が樹^{ぢま} 至^し極^{ごく}珍^{みじら}し物^{むん} 〈スル^{マンザイ}萬^{マン}歳^{ザイ} 至^{マンザイ}極^{マン}珍^{ザイ}し物 スル萬^{マンザイ}歳^{マン}ヨー〉

うりが下^{しちや}うとてい 遊^{あし}び出^で来^いらさや 〈スル萬^{マンザイ}歳^{マン} 遊^{マンザイ}び出^{マン}来^{ザイ}らさや スル萬^{マンザイ}歳^{マン}ヨー〉

* 伊舎堂 (現中城村伊舎堂) の前の三本ガジュマル、至極珍しいもの。その下で、遊びをやりたいものだ。

7. 氣^ち張^ばりよーや うないぬ^{ちや-}達^{ちや-} いちゆう^{ちや-}ま {いちゆう^{ちや-}ま} かみらさやー

〈稲^{イニシ}摺^クり摺^ミり 米^ク選^ミり選^リり イヤササ ウリササ〉

炒^いりちけーみ 焼^やちけーみ 焼^{とうない}きば 隣^くぬ炒^くり臭^きさ 〈同前〉

* (前出) * 炒めものを食べるか、焼いたのを食べるか。焼いたら隣の炒めものがくさい。

8. 夜^ゆや明^あきたい 太陽^{ていだ}や上^あがやい でい^{でい}吾^わ達^{ちや} マタ遊^まば 〈通^とティ来^きヨ 通^とティ来^きヨ 互^ごニ遊^ごバ〉
 いーなぬへーな 御^{うむど}戻^もいみせーびみ なーひん遊^ごびみそーり 〈同前〉

* 夜は明けたか、太陽は上がるか、さあ我々はマタ遊ぼう。〈通ッテオイテ、通ッテオイテ、互ニ遊ボウ〉

* そんなに早くお戻りなさいませ。もっとお遊びなさいませ。

9. スリ^{あがり}東^{わた} うち渡^{わた}てい 〈スリスリヌ〉 飛^とぶる^{あや}綾^{あや}蝶^は
 〈スーリサーサー スラヤサハイヤ 珍^{みじ}ラサウストラサ〉
 先^まじゆ待^まてい蝶^は 〈スリスリヌ〉 吾^わが染^すみてい持^もたさ 〈同前〉

10. 今^な帰^ち仁^{じん}ぬ城^{ぐしく} ヨンサー 霜^{しむ}成^{ない}ぬ九^く年^に母^ぼ 〈サー ヒヤルガヘイ ササ ヒヤルガヘイ〉
 志^し慶^ち真^ま乙^う樽^とがヨンサー 貫^ぬちやいはちやい {はちやい} 〈同前〉

11. 海^{うみ}やからーに惚^ふりてい 夜^ゆ明^あきどうし知^ちらぬ
 夜^ゆぬ明^あきてい 〈エイサ エイサ エイサ エイサ…同時に〉 太陽^{ていだ}や 上^あがる^ま返^まん
 〈海^{うみ}ヤカラー ドンドン スーリハイスーリ マタハイスーリ〉
 親^{うや}が持^もたちやる 夫^{うと}や 鍛^{かん}冶^じ屋^や前^めうちちびふいんがー
 吾^{わん}どうし持^もつちやる 〈エイサエイサエイサエイサ〉 夫^{うと}や くさり 鍋^なら 鋼^く 〈同前〉

* (略) * 親が持たせる夫は、鍛冶屋の尻が汚れた奴。私が自分で選んだ夫は、くされ鋤掛け屋。

12. 畦^{あぶ}越^くいる水^みや 上^う揚^やぎりばや止^とまる ユーイヤネ 十^じ七^{しち}八^{はち}花^{はな}や サー 止^とみやならぬ
 〈ハイヤ 三^{さん}線^{せん} サンシナー エイサ エイサ エイサ エイサ エイサ〉

* 畦を越える水は、上盛りすれば止まる。十七八の花(娘の勢い)は止めようもない。

※ この他に『崎山誌』には本調子の曲として以下の曲が記載されている。

・ 久^く高^{たか}万^{まん}寿^{しゆ}主^{しゆ}や 清^ちら 妾^め とめーてひんがち ヨー玉^{たま}黄^{くわん}金^{ごん} エサ
 夕^ゆ辺^{へん}又^{また}話^わヌクームッサ スリサーサー ヘイスリサーサー ヒヤウリサーサー スリ

・ 今^き日^ゆぬ誇^{ふく}らさや なうにじゃな髻^{たて}いる 蕾^ちでい居^うる花^{はな}ぬ サンサ 露^{ちゆ}ちやたくてい
 目^め出^で度^たイ 目^め出^で度^たイ 目^め出^で度^たイ スリスリ 目^め出^で度^たイ

・時遅くなる^{とちうし} 迄^{までい} ちる^{ぐワ-} 小^う や起^や きと一^{ぎよう} てい 夜^や 業^{ぎよう} どうしゆんな
 アンシ働^{フル} キ悪^{フル} イイウト ムチュンドイ イェーキン^{チュ-} 人^{ユミ} 又^{ユミ} 嫁^{ユミ} ナサヤ
 錦^{さん} 紗^さ ぬ縮^{ちりめん} 緬^{さん} 金^{さん} ぬ指^{わ-} 輪^{わ-} 吾^{わ-} が大阪^{わ-} からぬ 土^み 産^や ど一^{ぐワ-} ちる^{ぐワ-} 小^{ぐワ-}
 此^く 又^く ヤッ^く チー^く ヤ^く 口^{クチ} ビケイ 吾^ワ ン^{ハジ} 恥^{ハジ} カシシ^{ハジ} ミユン^{ハジ} ナ

* 錦紗の縮緬、金の指輪。僕の大阪からの土産だよ、チルー（女の名）ちゃん。
 コノ兄サンタラ 口バツカリ。私ニ恥ヲカカサナイテヨ。

※ 以下は、一二揚ギ

13. 谷^{たん} 茶^ち 前^{やめ-} ぬ^{め-} 浜^{め-} にヨ すり^{ぐワ-} る^ゆ 小^{ちよ-} が寄^{ちよ-} てい^{ちよ-} 来^{ちよ-} よん^{ちよ-} でい^{ちよ-} さよ一^{ちよ-} へい

〈すりる小が寄てい来よんでいさよ一へい ナンチャムサムサ リヒャン小ソイソイ〉
 すり^{ぐワ-} る^ゆ 小^{ちよ-} やあら^{やまとう} んヨ 大^{やまとう} 和^{やまとう} 大^{やまとう} 和^{やまとう} みず^{やまとう} んでい^{やまとう} さよ一^{やまとう} へい
 〈大和^{やまとう} 大和^{やまとう} みず^{やまとう} んでい^{やまとう} さよ一^{やまとう} へい ナンチャムサムサ リヒャン小ソイソイ〉

14. 道^{みち} 端^{ばた} ぬ^{ばた} さ^す し^す やヨ 袖^す 振^し り^が ば^し 縫^が る^し へい

〈イルサーズネーグイヨ一 イースリ サングワ ソイソイ リヒヤングワ ソイソイ〉
 吾^わ 身^み ん^み さ^み し^み なとてい^{と-} ヨ 里^{さと} がス^{さと} リ縫^{さと} る^{さと} へい 〈同前〉

* 道ばたのサシ（植物の名、ヤブジラミ）は袖を振ると縫り付く。私もサシになってあの人に縫り付くのだ。

15. 渡^と 久^う 地^ぐ 港^{ちみなと} にさ^い さ入^い りてい^い さ^い さ入^い りてい^い 魚^い 小^{ぐワ-} や居^う らん^う さ^う み^う な^う ふ^う る^う れ一

サーサ 魚^い 小^{ぐワ-} や（同時に〈チウリウリヤサ〉）居^い らん^い さ^い み^い な^い ふ^い る^い れ一 カマヤシナー
 〈スイ カマヤシナー カマヤシナー スリ〉
 村^{むら} ぬ^{むら} 淋^{さび} さ^{さび} や伊^い 豆^づ 味^み 村^{むら} 伊^い 豆^づ 味^み 村^{むら} 田^{でん} ぶ^ぶ く^く 前^め な^な ち^ち 伊^い 野^の 波^は 満^{まん} 名^な
 サーサ 田^{でん} ぶ^ぶ く^く 前^め な^な ち^ち 伊^い 野^の 波^は 満^{まん} 名^な カマヤシナー 〈同前〉

* 渡久地港に毒草を入れて。（でも）魚はいないよ、巻き貝の貝殻ばかりさ。

* 集落の疎らなのは伊豆味のムラ。田圃を前になして（いるのは）伊野波と満名。

16. ヨ一^カ 加^カ 那^ナ ヨ一^ナ 根^{に-} 引^び 前^{ちめ-} やな^{と-} と^と さ^と ヨ一^カ 加^カ 那^ナ ヨ一^ナ 〈スーリ イヤサノサ ササ イヤサノサ〉

ヨ一^カ 加^カ 那^ナ ヨ一^ナ わ^わ が^が う^う ん^ん ぞ^ぞ 来^{ちよ-} よ^{ちよ-} しが^{ちよ-} ヨ一^カ 加^カ 那^ナ ヨ一^ナ 〈同前〉

* イトシイ人ヨ 婚礼前になっているよ、イトシイ人ヨ。私の思う女が来ているが。

17. 旅^{はまやど}や浜宿い 草^は {草} ぬ葉^はや枕^{まくら}
 <ニセター^{ニセター}ヤヨー 浜^{ハマ}ウティシマウイウイ 二才^ニ達^ダヤヨー シマ^{シマ}出^デチ^チ話^ワソーヤー>
18. 名^な護^ごから羽^は地^ぢや伊^い差^さ川^{かわ}や一^{いち}里^り <真^ま喜^ぎ屋^や兼^が久^く迄^{まで}や 二^に里^りぬ^ぬ心^ち算^い サーミナウリサンセイ>
 うい^{うい}ぬ^ぬ前^めぬ^ぬ黒^{くろ}潮^{しほ} 渡^{わた}ららん^{ららん}黒^{くろ}潮^{しほ} <七^{なな}ち^ち橋^{はし}架^かきてい 渡^{わた}ち^ち給^たり サーミナウリサンセイ>
- * 名護から羽地は、伊差川（現名護市伊差川）では一里、真喜屋（現名護市真喜屋）の浜まででは約二里。
 * うい（不詳）の前の黒潮、渡れない黒潮、く七つ橋を架けて、渡して下さい。
19. だんこ^{もいなら}舞^ま習^{じゆ}ゆんでい 名^な護^ご東^{あがり}江^{かゆ}通^{かゆ}てい^{みちなか}ヨ^しンサ^わー 通^しる^わ道^わ中^わに ちん^しし^け割^わてい
 <スー^スリ^リヌ^ヌ ダン^{ダン}コ^コヨ^ヨーダン^{ダン}コ^コヨ^ヨー ス^スリ^リヤ^ヤリ^リク^クヌ>
 ちん^しし^け割^わら^らよ^よいか 頭^{ちぶる}割^われ^れし^しむ^むさ^さヨ^ヨンサ^サー 頭^{ちぶる}割^わて^てい^いか^から^らや 世^し間^まなら^らん^んさ <同前>
20. 蔓^{かんたば}葉^ばや茹^ゆでいてい^い ヨ^ヨンサ^サー 蔓^{かんたば}葉^ばや茹^ゆでいてい <イ^イヤ^ヤヨ^ヨー ス^スー^スリ^リヌ> だん^{だん}く^くさ^さび^びら
 <鳥^{サシシ}歌^カ三^ニ線^{セン}> 仲^ナ宗^{ハジ}根^ニブ^ブク^クヤ <白^{シラ}玉^{タマ}ジュ^{ジュ}ッ^ッサ^サヌ リ^リヒ^ヒヤ^ヤリ^リ>
- * 仲宗根ノ田圃ハく白玉ガイッパイ)
21. 今^{ことし}年^し吾^わが庭^{にわ}や 梅^{うめ}や咲^さかな^なそ^そてい <朝^あ夕^ゆ 鶯^{うぐいす}ぬ^ぬ通^{かゆ}てい^と鳴^とと^とさ イ^イー^ママ^デン^スナ^ー ヌ^ヌヤ^ヤリ^ヤリ>
22. あ^あき^きよ^よ天^{てん}川^がや 鳥^{しま}横^{ゆく}にな^とと^とさ^さヨ^ヨ で^でい^い吾^わ達^だ発^わち^ち別^{わか}ら^ら夕^ゆ辺^べぬ^ぬ時^じ分^{ぶん}
 <夜^ユ起^ウキ^キシ^シタ^タク^クリ ヤ^ヤブ^ブヌ^ヌチ^チョ^ョイ^イチ^チョ^ョイ テ^テン^ンシ^シト^トウ^ウリ^リト^トウ^ウテ^テン>
- * ああ、天の川が（もう）鳥の横になっているよ。さあ僕らもお別れしよう。昨夜と同じ時分（になったよ）。
23. 加^カ那^ナヨ^ヨー 思^う影^{むかぢ}ぬ^たて^てば ヨ^ヨー加^カ那^ナヨ^ヨー <加^カ那^ナヨ^ヨー 加^カ那^ナヨ^ヨー ヤ^ヤリ^リヤ^ヤリ シ^シー^シ>
 加^カ那^ナに^にう^うち^ち惚^とり^りてい <ハ^ハル^ルヨ^ヨー^ンゾ^ゾヨ^ヨー 加^カ那^ナヨ^ヨー シ^シー^シ>

※ この他に『崎山誌』には、一二揚ギの曲として以下の曲が記載されている。

・海^ほぬ^らちん^{ちん}法^は螺^らが 逆^ささ^さな^なて^てい^い立^たて^てい^いば ひ^ひさ^さぬ^ぬ先^あ々^あ 危^あな^なさ^さや
 支^ワ度^ツヌ^ツ悪^スサ^バヤ 側^ウナ^チリ^ユナ^マリ^ナリ サ^サー 浮^ウ世^チヌ^ユ真^マ中^ナ キ^キヤ^ヤヌ^ヌへ^へい^いへ^へい^いへ^へい^い

念仏

今泊 1
♩ = 112

兼次 1
♩ = 104

みぐりば にんご (ていち[♩]ていち[♩] どしび)

スリ サ サー エイスリ サ サ ヒヤウリ サ サ

*1

今泊

1. み - な - - - - - よ - - - - -
2. しちぐわ - ち に - な り - ば みちぶとう

兼次

1. し ち - ちや - ふあち - ぐわ - ちや - みちぶとう
2. ウネマタ - やまに すだちる - や

崎山 1
♩ = 104
→ 112

しちぐわ - ちや - は ち - ぐわ - ちや みちぶとうけ

- な よ - ふ - - - - - と う - き <エイサ - - - サ
- けん - か - - - - - ざ - てい <エイサ - - - サ

けん - か - ざ - てい <エイサ - - - サ
ま ゆ - が - ら - し <エイサ - - - サ

- ん - か - ざ - てい <エイサ - - - サ

1-2. エイサ イヤウリ サ サ - スーリ サ サ イヤササ)

1-2. エイサ ヒヤウリ サ サ - スーリ サ サ -)

1-2. エイサ ヒヤウリ サ サ - スーリ サ サ) *2

*1 「スリササー」は弾き手、踊り手、弾き手の順に繰り返される。
*2 実況では「イヤササ ハイヤ」という囃しが続く。以下この囃しは全曲で掛けられる。

二合小

今泊 2
♩ = 108
→ 112

1. くまぬ はんし めや うち む (ぬ) ゆた
2. いちごが うたび みせら にんご が うたび

崎山 4
♩ = 116

1. くまぬ はんし めや うち む ぬ ゆた
2. いちごが うたび みせら にんご が うたび

さぬ <かみていみぐやびら> サブエイ サブエイ
みせら <かみていみぐやびら> サブエイ サブエイ

さぬ かながな とぅ <サグエイ サグエイ
みせら かみていみぐやびら <サグエイ サグエイ

サ サブ エイ <ピラル - ラ - ラ - ラル - ラ -
サ サブ エイ <ピラル - ラ - ラ - ラル - ラ -

サン サグ エイ ピラル ラ ラ - ラル ラ -
サン サグ エイ ピラル ラ ラ - ラル ラ -

ニンゴドヤ ニンゴドヤ サキニン ゴ イッショ ニンゴ - チェチエ>
ニンゴドヤ ニンゴドヤ サキニン ゴ イッショ ニンゴ - チェチエ>

ニンゴドヤ ニンゴドヤ サキニン ゴ イッス サンゴ チェチエ>
ニンゴドヤ ニンゴドヤ サキニン ゴ イッス サンゴ チェチエ>

今泊 3

前田節

♩ = 116

1. く - と う - し - め - ん - た る - い に め ん そ ち
 2. は - る - め - く ぶ た - ま い - あ み - ふ り

ば た ま る - <スリ スリ メ デ タイ> く と う し
 <スリ スリ メ デ タイ> ふ ら - な

- め ま め - さ き - な い ち - め - み - が <ユ テ イ カ ラ
 - て い ん た - ま る - く ま め - と う - め - ち <ユ テ イ カ ラ

クヌチャ ヌマンカ - ナ - ヌディアシ バナ チェチェ)
 クヌチャ ヌマンカ - ナ - ヌディアシ バナ チェチェ)

今帰仁ぬ城

今泊 4
♩ = 116

崎山 10
♩ = 120

サ イ ヤ ヌ ガ ヘ イ <サ サ イ ヤ ヌ ガ ヘ イ> 1. な ち じ
 1R. し - ち

1. な ち じ
 1R. し ち ま

ん め - く し く - ヨ ン サ し む な - い め
 - ま - う - と う - だ る が - ヨ ン サ め ち ゃ い は ち ゃ

ん め - く し く ヨ ン サ - し む な い め
 う と う - だ る が ヨ ン サ - め ち ゃ い - は ち ゃ

- く に - ぶ くサ イヤヌガ ヘイ ササ イヤヌガ ヘイ
 - は ちゃ い くサ イヤヌガ ヘイ ササ イヤヌガ ヘイ
 - く に ぶ くサ ヒヤルガ ヘイ ササ ヒヤルガ ヘイ
 い は ちゃ い くサ ヒヤルガ ヘイ ササ ヒヤルガ ヘイ

九年母ん木

今泊 6
♩ = 116

1. くぬぶん - ぎぬ - - しちゃ - うてい - ヨ - - ス
 2. あ - り - あば - - あ - ば - ぐわ - ヨ - - ス

兼次 9
♩ = 108

1. くぬぶんぎ ぬ - - しちゃ う てい - ヨ - - ス
 2. ヘイ あば ぐわ - - あ - ば ぐわ - ヨ - - ス

- リ - - ぬぬま - ちゆる - - い な - ぐ <ス
 - リ - - とうしや - いくち - な た - が <ス
 リ - ぬ - ぬま ちゅ る - い な ぐ <ス
 リ - とう - しい く ち - な と が <ス

リ - あんしん ちゅらさが や て げ あん て)
 リ - じゅ - しち はちやが や わん ね さん じゅ)
 リ - あんちん ちゅらさが や - て げ あん て -)
 リ - じゅ - しち はちやら はじ わん ね さん じゅ -)

稲摺り

兼次 3
♩ = 108
→112

イニシリ シリー クミユリ ユーリ イヤササウリササ

今泊 5
♩ = 116

1. ちばていくいり よ うないぬ ー ちゃ ー ー ひちゅ
2. なんじゃ ー が ま ー す ー く ー てい ー ー く が

兼次

1. く とろし うい ー ている いに や ー ヨ ー あ ー ぶ
2. あ わぬ ー ゆら ー ー り ゆ み ー く みぬ

崎山 7
♩ = 120

1. ちばり よ や うないぬ ちゃ ー い ちゅ ー
2. いりち け み やちけ ー み ー や き ー

ー ま ー ー し ていか みらさ や <イニシリ
ー に ー ー な びい ー し ー てい <イニシリ

ー ー し あぶしま ー く ー ら <イニシリ
ー ー どう ゆらり ー ゆ ー さ <イニシリ

ー ー ま ー いちゅま か みらさ や <イニシリ
ー ー ば とうない ぬ いりく さ さ <イニシリ

1-2. シ リ ー ク ミ ユ リ ユ ー リ イ ヤ サ サ ウ リ サ サ

1-2. シ リ ー ク ミ ユ リ ユ ー リ イ ヤ サ サ ウ リ サ サ)*

1-2. シ リ ー ク ミ ユ リ ユ ー リ イ ヤ サ サ ウ リ サ サ

*実況では<イヤササ ハハ>という囃しが続く。

テンヨー

今泊 8
♩ = 116

テンヨー テンヨ シトリクテンササ アーリョーアヌ

今泊
ユイ ヤ ナ <イヤササ> 1. かりゆーしぬ
1R. ゆぬあーきてい

兼次 2
♩ = 104
→108

1. あがりんぞぬー
1R. うりがーしちや

崎山 5
♩ = 120

1. あがりんぞぬ
2. いずぬーきぬ

あしーびー うちはりーていー から
ていだぬーヨー あがらーわんー ゆーた

ぎぎーちー ゆだむちーぬー ちゅら
うとーていー あしびでいーきー らさー

ぎぎ ちー ー ゆだむちーぬー ちゅら
はな やー ー ましらばーなー さか

やさ <テンヨー テンヨ シトリクテンササ>
<テンヨー テンヨ シトリクテンササ>

さや <テンヨー テンヨ バチチリタンサッサイ>
<テンヨー テンヨ バチチリタンサッサイ>

さち <テンヨー テンヨ シトウリトウテンササ>
<テンヨー テンヨ シトウリトウテンササ>

1-1R. アーリ ヨーアヌーユイヤ ナ (イヤササ)

1-1R. ハーリ ヨーイヌ ヨーイヤ ナ)

1-2. ハーリ ヨーイヌ ユーイヤ ナ リウリウリエイサ)

何ガタ辺

今泊 7
♩ = 116

1. あがり - あか - がりば - しみな - れが
2. ふにや - ちな - とぅりば - んぞや - すでい

崎山 3
♩ = 112
→ 116

しちぐわ - ちに - なりば - みやら - びぬ -

- いちゅい - チル - ヒヤヌ (テソ ハンジン)
- ひちゅい - チル - ヒヤヌ (テソ ハンジン)

- いそ - さ (シチド ヒド)

ヌガユビ クンタル (アミフティクン タサ - サヨサ ヨサヨサイ)
ウイマヌ チャクシャ (ジャハナヌ タンピョー - サヨサ ヨサヨサイ)

ヌガユビ クンタル (アミフティクン タン - チヨサ ヨサ)

イルサスラ

イルサスネ

今泊 9
♩ = 108
→ 112

エーヤングワソイソイ (ヤングワソイソイ) ヤングワ

崎山 14
♩ = 112
→ 116

1.みちば
1Rわみん

ーソイーソ イヨー たがしーはじ

ーたぬーーさしやーヨーすでいふりば
ーさしーーなとていーヨーさとうがスリ

ーみーーーたが (イルーサスラーユイヨ)

ーしがるへい (イルーサスネーグイヨ)
ーしがるへい (イルーサスネーグイヨ)

へいースーリ (イヤングワソイソイ)

エーイースリーサングワソイソイリヒヤングワソイソイ
エーイースリーサングワソイソイリヒヤングワソイソイ

加那ヨ一

今泊11
♩ = 112

カナヨ - シ - シ < イヤ イヤ - シ - シ > カ ナ - ヨ

崎山23
♩ = 138

カ ナ - ヨ

う む - - か - - じ - - ぬ た て い

う む - - か - - じ - - - - - ぬ - た -

- - - ば - - ヨ - - - カ ナ - ヨ < カ ナ ヨ

- て い ば - ヨ - - - カ ナ ヨ < カ ナ ヨ -

ト ッ ヨ カ ナ - ヨ - ヲ イ ヲ ヲ イ ヲ ヲ イ > や ど う - に

カ ナ - ヨ ヤ リ ヤ リ - シ - シ > か - な に

う ら - り ら ぬ - < ハ ル ヨ ン ソ - ヨ - カ ナ ヨ - シ - シ >

う ち ふ り - て い - < ハ ル ヨ ン ソ ヨ カ ナ ヨ - シ - シ >

谷茶前

兼次10
♩ = 112

イヤ - アングワ ソイソイ リハングワ ソイソイ リハングワ

兼次

タマ サヤ ムラヌ シチャウ ティイサソイ ソイソイ

今泊10
♩ = 112
→ 116

たんちゃ - めぬ - - はまに - ヨ - - す - り

兼次

1. たんちゃ - めぬ - - は - ま - に ヨ - す -
2. するる - ぐわ - や - あらぬ - ヨ - - や -

崎山13
♩ = 120

1. たんちゃ - めぬ - はまに - ヨ - す -
2. すりる - ぐわ や - あらぬ - ヨ - やま

- - る ぐわが ゆてい - ちよ たんな - へい ぐす -

る る → ぐわが ゆてい ちよん でいさ - な へい ぐす -

ま とう - やま とう みずん でいさ - な へい ぐす -

り - る - ぐわが ゆてい ちよん でいさ よ - へい ぐす -

とう - - やま とう - みじゅん でいさ よ - へい ぐす -

り - - - る ぐわ が ゆ ていちよ たんな -
 る - - - る ぐわ - が ゆ ていちよん でいさな -
 ま - - - とう やまとう みじゆん でいさな -
 り - る ぐわ - が ゆ ていちよん でいさよ -
 ま - とう やま とう - みじゆん でいさよ -

1-2. へい) ヤ ン グ ワ ソ イ ソ イ (イ ヤ ン グ ワ ソ イ ソ イ)
 1-2. へい タ ン チャ マ シ マ シ ア ン グ ワ ソ イ ソ イ)
 1-2. へい ナ ン チャ ム サ ム サ デ イ ヤ ン グ ワ ソ イ ソ イ)

デンスナー

今泊12 な ま - す - ゆるう た や - - ち - ちえる
 ♩ = 112
 崎山21 く とうし - わ が に わ や - ん - み や
 ♩ = 132
 - う び あ - し が (イ - マ - デ ン ス ナ ヌ ヤ リ ヤ リ
 - さ か な そ てい



ヤリ) た - し - か - なかみ - ちぬ - かまれ

- <あ さ ゆ - うぐい すぬ - かゆてい

やらはじ ど <スーリ - デンス ナ ヌ ヤリヤリ ヤリ>

なとう - さ イー マ - デンス ナ ヌ ヤリヤリ ヤリ)

今泊13

汀間当

♩ = 112 → 116



てい まとう - - あぶさ け - ぬ - かぬし

- ちゃ - ぬ - は - ま - う り - てい - - - てい - -

ま - と) <まる み か - なとう うきにん

かみやが) <いぬ - はな し - <サ リカチャン

ナ - ヤ マ ル - ミ - カ - ナ - - -)

カマヤシナ

今泊14
♩ = 116

崎山15
♩ = 120
→126

とうぐち みなとに ささいり てー ささいり ていー

1. とうぐち みなとに ささいり ていー ささいり ていー
2. むらぬ さびさや いずみむらー いずみむらー

とうぐち にせたや でいかちゃしが <サーサ はまむとぅ
いゆぐわや うらんさ みなふるーれ <フウリ ウリマサ>
たぶく めーなち めはまんーな -サーサ いゆぐわや
-サーサ -たぶく

にせたや なしーむどぅ いカマーヤシナー
うらんさ -み-な-ふるれカマーヤシナー
めーなち -ぬ-は-まん なカマーヤシナー

スリカマヤシナー -カマーヤシナーヤッサイ)

<スリカマヤシナ -カマーヤシナー-ス-リ>
<スリカマヤシナ -カマーヤシナー-ス-リ>

だんこ

今泊15 $\text{♩} = 116$

1. だんこ -ぶし- ならゆんでい なく-あ がり -かゆてい
 2. みやら -び-に -ぶ-りてい ぐし-ち むら -かゆてい

崎山19 $\text{♩} = 132$
 →138

1. だんこ -も い ならゆんでい なくあ- が-り -かゆてい
 2. ちんし -わ ら ゆ-い か ちぶる- わ-れ -しむさ

ヨンサ -<かゆる -み ち な-か-に -ちんし け-かちわてい>
 ヨンサ -<かゆる -み ち な-か-に -ちんし け-かちわてい>

ヨンサ -かゆる -み ち な-か-に -ちんし け-わてい
 ヨンサ -ちぶる -わ てい か-ら-や -しきん ならんさ

ダン コ ヨ ダンコ <ス リ ヤリクヌ>
 ダン コ ヨ ダンコ <ス リ ヤリクヌ>

<ス - リ -ヌ ダンコ ヨダンコ ヨ スリ ヤリクヌ>
 <ス - リ -ヌ ダンコ ヨダンコ ヨ スリ ヤリクヌ>

今泊19

赤山

$\text{♩} = 116$

1. しぬび -じよ や -あ し が かく り-じよ や
 2. えどうめ -み や -ら び ぬ いる ぢゅら-さ

-ねらぬヤリクヌ アキヨ -ワ-ガ-ウ-
 -ねらぬヤリクヌ アキヨ -ワ-ガ-ウ-

ミ -ノウ -ナカヌ -ア サ ギ <ハラユイユイ>
 ミ -ノウ -ナカヌ -ア サ ギ <ハラユイユイ>

今泊16

国頭岬から

♩ = 116

1. くんちゃん さちから あみふら - ち ゆんぬ いらぶや
 2. うみぬ さしぐさ

きり に - どう - かか ゆん ど <シチャワ タ ドッサイ
 なび ち - ぬ - - ちゅら - さ < イヤートゥワントゥヤ

- チ ナ ヌ ヘイ ヘイ シ マ ヌ ヘイ ヘイ ヘッ ヘ イ
 - ア ン シ ナ リ カ ナ シ マ ヌ ヘイ ヘイ ヘッ ヘ イ

今泊17

仲門へい

♩ = 116

1. なかじよ - へい - なかじよ - へい - あしび
 2. あしび - し が - - い - き ば - い なく

- し が - い かに な か じよ - へい < あ し び し - が
 み っ ち ゃ い - い き が さ ら わ ん ち ゅ い なく み っ - ち ゃ い

- い かに な か じよ - へい イ ヤ イ ヤ - シ - シ
 - い き が さ ら わ ん ち ゅ い イ ヤ イ ヤ - シ - シ

蔓 葉

今泊18
♩ = 116

兼次11
♩ = 112

崎山20
♩ = 132

かんだ - ばや - - ゆりてい ヨン サ - かんだ

1. かんだ - ばや - ゆりてい ヨン サ - かんだ
2. からす - ぐわや - かきてい ヨン サ - からす

かんだ ば や - ゆりてい ヨン サ - かんだ

- ば - - や < ゆ り て い イ ラ - ヨ ス リ -

- ば - や ゆ - り て い < イ ヤ - ヨ ス リ - -
- ぐ わ - や か - き て い < イ ヤ - ヨ ス リ - -

- ば - - や ゆ り て い < イ ヤ - ヨ ス リ -

エイサ) いらんこ - さ び ら < シマウタ ザン シン >

- サヘイ) だん く - さ び ら < シマウタ サン シン >
- サヘイ) だん く - さ び ら < シマウタ サン シン >

- ヌ -) だん こ - さ び ら < シマウタ ザン シン >

ナカズニ ブックヌ < シラタマ チュラサヤ リヒャーリ - リ > *

アシビヌ チュラサヤ < ニンジュヌ スナワイ リヒャアツティ アツティ アツティ >
ナハズニ ブックヤ < ナマイヌ チュラサヌ リヒャアツティ アツティ アツティ >

ナハジニ ブックヤ < シラタマ ジュッサヌ リヒャーリ - リ >

*実況では<イヤササ>という囃しが続く。

御願節

里が

今泊20
♩ = 66-69

サ - - サ - - ゆにげ - さび - - ら (ウネ ササ)

今泊

1. みる く - ゆぬ - ゆ-が ふ - - えどうま - い に
2. えどうま - いぬ - い-に や - - しゃぶぬ - は ぬ
3. しら ぎ - うとう - す-い や - - とうくぬ - め に

兼次14
♩ = 112

1. さとうが は てい くいて る - むんじゅ る-ぬ
2. はなす み ぬ てい さ じ - たがす み-てい

1. さとうが は てい くいて る - むんじゅ る-ぬ
2. はなす み ぬ てい さ じ - たがす み-てい

- い も - ち ちゆくい - むちゆ - く い ぬ
- ぐとう - に まんさ - くゆ - に が てい
- かざ - てい なしぐわ - うた - し み てい

かさ や <かんし わ ん - し - だ さ
くいた が <かなし う み - ん - ぞ が

かさ や <かんし わ ん - し - だ さ
くいた が <かなし う み - ん - ぞ が

うにげ - さび - ら - うにげ - さび - - ら (ウネ ササ)
うはち - あぎ - ら - うはち - あぎ - - ら (ウネ ササ)
んまが - めか - た - んまが - めか - た (ウネ ササ)

うにげ - さび - ら - うにげ - さび - - ら (ウネ ササ)
うはち - あぎ - ら - うはち - あぎ - - ら (ウネ ササ)
んまが - めか - た - んまが - めか - た (ウネ ササ)

いんが や た - ら)
すみていくいた - せ)

いんが や た - ら)
すみていくいた - せ)

<サ - サ - - うにげ - さび - - ら ウネ ササ)
<サ - サ - - うはち あぎやび - ら ウネ ササ)
<サ - サ - - んまが - めか - た ウネ ササ)

<サ - サ - - うにげ - さび - - ら ウネ ササ)
<サ - サ - - うはち あぎやび - ら ウネ ササ)
<サ - サ - - んまが - めか - た ウネ ササ)

兼次 4

祝い節

♩ = 108

1. くるし - まぬ - - な - れや - ヨ -
 2. かりゆ - - しぬ - - - あ - しび - ヨ -

〈サ サ〉 あしび - な - - - れ - で
 〈サ サ〉 うち は - り - - - てい - か

- むぬ - ヨ - ササ - イワ - イヌ
 - らや - ヨ - ササ - イワ - イヌ

サ - ス - リユ - バ - ナウ - - レ -
 サ - ス - リユ - バ - ナウ - - レ -

スリ東

兼次 7
♩ = 104

1. とうびた - ちゆる - - は - べる - スリス -
 1R. まちゆ - まてい - - は - べる - スリス -

崎山 9
♩ = 120

1. スリー - あ - がりう - ち - - む
 1R. まじゆ - まてい - あ - や - - は

リヌ - 〈スリス - リヌ〉 あや - - はべ - る
 リヌ - 〈スリス - リヌ〉 まちゆ まちちり ら

かてい - 〈スリス - リヌ〉 とうぶる あやはべ - る
 べる - 〈スリス - リヌ〉 わがす みていむた - さ

1-1R. 〈ス - リ サ サ - スラヤサ ハイヤ イチュイチュイチュイ〉

1-1R. 〈ス - リ サ サ - スラヤサ - ハイヤ ミジラサ ウスラサ〉

兼次 5

弥勒世

♩ = 96 → 100

ヨイ シュラ ヨイ イワイヌ ネ ウネ イワイヌ
 シュラ ヨイ イワイヌ ネ ウネ イワイヌ

1. 2.
 ネ ウネ アシブサ ヤ<シュラ ヨイヨイ ヤヤ>*1.
 ネ ウネ アシブサ

1. みるく - ゆや - - たぼ ち - あしび
 2. かりゆ - しぬ - - あし び - うちは
 3. みるく - ゆや - - たぼ ち - あしぼ

わ - ん - あ - じ - び う - とうら - わ - ん - う - とう -
 り - てい - か - ら - や ゆ - ぬあ - き - てい - てい - だ -
 - わん - う - とう - り ていあし - なみ - す - る -

り ウネ あしぶさ や<シュラ ヨイヨイ シュラ ヨイ
 ぬ ウネ あがるま でんシュラ ヨイヨイ シュラ ヨイ
 てい ウネ あしぶさ や<シュラ ヨイヨイ シュラ ヨイ

*2. 1-3. イワイヌ ネ ウネ イワイヌ ネ ウネ アシブサ ヤ)*1.
 *1. 実況では<イヤササ(ハハ)>という囃しが続く。 *2. この囃しは最後に弾き手によっても繰り返される。

兼次 6

新安里屋ゆんた

♩ = 104

1. サ なきじんよいとこいちどはおい -
 2. サ - たぐさとるならいざよいつき -

で<サ - ユイユイ> にしはほくざんひがしは
 よ<サ - ユイユイ> ふたりできがねもヤレホニ

うんてん こ<マタ ハーリヌ チンダラ カヌシャマ ヨ>
 みずいら ず<マタ ハーリヌ チンダラ カヌシャマ ヨ>

兼次 8

兼次板干瀬

♩ = 108



1. かにし いたび しーに ー ー ー うち い ひく
 2. はじみ てい どう や しーが ー ー ー んぞ や くぬ

な み ぬ ヨ ー ー <か ね し み や ら び ー ぬ>
 む ら ぬ ヨ ー ー <み や ら び が や ゆ い ー>

み わ れ ー は ぐ ち ー <カ ネ シ ミ ヤ ラ ビ ア ン チ ュ ラ サ ガ ヤ>
 い る き さ ち ゅ ら さ る <シ バ シ ク マ ウ テ イ カ タ テ ィ ー ト ウ ラ セ>

兼次12

ましゅんく

♩ = 112



1. ヨ ー テ ー さ し が ー ち ぬ う い に ヨ ー テ
 1R. ヨ ー テ ー う り が ー な い ー な ら ば ヨ ー テ

<さ し が ー ち ー ぬ う い に> な ー べ ら
 <う り が ー な ー い な ー ら ー ば あ ひ ぐ わ に>

ば ー ー な さ か ち ヨ <ウ ネ シ ク テ ン ト ウ ン テ ン>
 ち ん む て い う え さ な や <ウ ネ シ ク テ ン ト ウ ン テ ン>

兼次13

あぬ杜

♩ = 112 → 116



1. あ ぬ む い ぬ た な か ー ー き ぶ ー し ぐ わ ぬ た ち ゆ さ キ ブ
 た し か わ が う や ぬ ー ー た ば ー く ー き ぶ ー し
 2. い ず み ふ る が ち や ー ー む い ー ど う ひ ざ み と さ ム イ
 く と ば か わ ら す る ー ー ぬ は ー と う ー ま ん ー な

ー シ グ ワ ヌ タ チ ュ サ
 → <サ ヨ ン サ ヨ ン サ ヨ ン サ ヨ ン サ サ ヌ イ ヤ サ ヌ サ>
 ー ド ウ ヒ ザ ミ ト サ
 → <サ ヨ ン サ ヨ ン サ ヨ ン サ ヨ ン サ サ ヌ イ ヤ サ ヌ サ>

兼次15

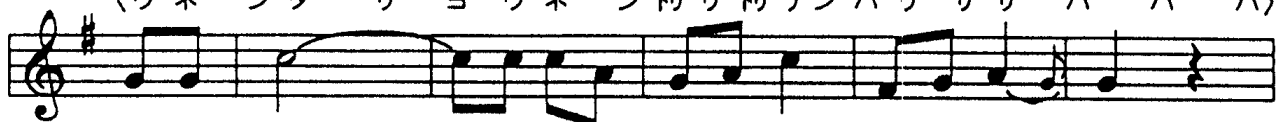
サヨサー

♩ = 88



*1.

ウネ シタ リ ヨ ウネ シトリトリテンハリササハハハ)
 (ウネ シタ リ ヨ ウネ シトリトリテンハリササハハハ)



1. サヨ サ - きゆめゆ - かる - ひ に
 2. サヨ サ - しらぎと - しゆ - い や
 3. サヨ サ - くとうし さ - る ど - し に



ゆ - にげ - ゆ - す - し - や くまぬ
 とくぬめ - に - か - ぎ - てい なしぐわ
 ゆ - にげ - ゆ - す - し - や あきてい



む - ら む - とう - ぬ スリ さかい うに - げ(ウネ
 う - た し - み - てい スリ んまが めか - た(ウネ
 とう - り ど - し - ぬ スリ ゆがふ うに - げ(ウネ



1-3. シタ リ ヨ ウネ シトリトリテンハリササハハハ)*2..

*1.この後、三線伴奏が3拍続き、歌が始まる。 *2.この囃しは最後に弾き手によっても繰り返される。

兼次16

十七八節

♩ = 112



じゅしち - はちぐる - や ゆまんぐいどう - まちゆる



- ヨ - - ゆんくり ていた ぼ - り わじゆ さびら



(サラドン ドン セ ウネハヤワツタンカンチルミグユサ)

崎山 2

七月念仏

♩ = 112

しちぐわち にんぶち やりがさ かんしてい - もき
 しみらな や シトウヨ テンヨ (エイサ - サ
 エイサ ヒヤウリ ササ - スーリ ササ)

崎山 6

伊舎堂ん前

♩ = 120

1. いさどうんめぬ - さんぶん がちまる - しぐく みじらし
 2. うりがしちや - うと - てい - あしび でいきらさ
 むん(スル マンザイ - しぐく みじらし むん スル マンザ - イヨ)
 や(スル マンザイ - あしび できらさ や スル マンザ - イヨ)

崎山 8

夜や明きたい

♩ = 120

1. ゆ - や あきたい - ていだや あがやい - でいわちやまたあしば
 2. い なぬ へ - な - うむどういみせびみ - なひんあしびみそり
 (カユティク ヨ - カユティク ヨ - タゲニア - シ - バ)
 (カユティク ヨ - カユティク ヨ - タゲニア - シ - バ)

崎山11

海やからー

J = 126

1. うみやからーにーふりていーゆあきどーしー
 2. うやがむたちやるうとーやーかんじゃーめーうち

ーしらなーゆぬあきていーていだーや
 ちびふいんぐわ わん どうしむつ ちやる うとーや

ーあがるーまでいーん (うみやカラ
 ーくさりーなびらく (うみやカラ

ドン ドン ースリハイスーリーマタハイスーリ)
 ドン ドン ースリハイスーリーマタハイスーリ)

崎山12

畦越いる

J = 126 → 132

あぶしーくいるーみじやーうやぎりば
 ーとうまーるーヨイヤーネじゅしちー

はちはなーやさとうみーやーなーらーぬ

(ハイヤ サン シン ーサンシ ナ イサ イサ イサ イサ イサ)

崎山16

ヨ一加那ヨー

J = 126

1. ヨカナヨーにびちーめーやなとー
 1R. ヨカナヨーわがうーんーそちよーし

ーさヨーカナーヨ (スリイヤ サノサ ササイヤ サノサ)
 ーがヨーカナーヨ (スリイヤ サノサ ササイヤ サノサ)

崎山17

旅や浜宿い

♩ = 126



たびや はまや どうい - - - く さ - く さ ぬ はやまく

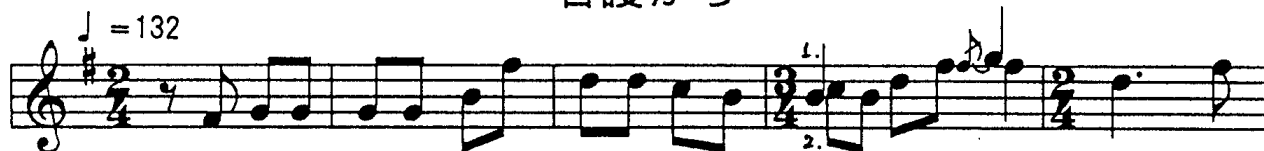


ら <ニセ ターヤ ヨ - - ハ マ ウ テ イ シ マ ウ イ ウイ
ニセ ターヤ ヨ - - シ マ ン イ ハ ナ ソ ヤ >

崎山18

名護から

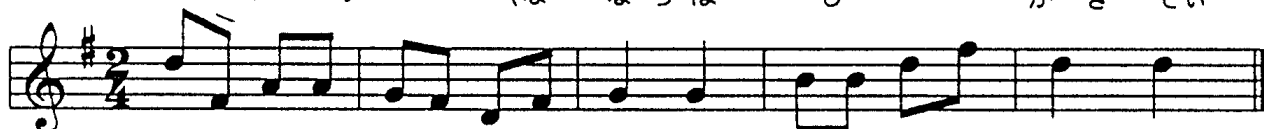
♩ = 132



1. な く か ら や は に ち - - - い ざ し ち ゃ や -
2. う い ぬ め め くる す - - - わ た ら ら ぬ -



い - ち り <ま - ち ゃ が に - く - ま で い や
く - る す <な - な ち ば - し - か き て い



- に り ぬ ち - む - い サ - ミ ナ ウ リ サン セイ >
- わ た ち た - ぼ - り サ - ミ ナ ウ リ サン セイ >

崎山22

夜起キシタクリ

♩ = 132



あ き よ - て い ん が - ら や - - し ま - ゆ く に - な と さ



- ヨ - で い ち ゃ よ - た ち - - わ か - ら ゆ び ぬ じ ぶ - ん



<ユウキ シタクリ - ヤブヌ ㊦イ㊦イ テン シトウリトウテン >

譜 6

イルサスネ
(崎山)

谷茶前
(崎山)

あぬ杜
(兼次)

名護から
(崎山)

ヨ一加那ヨ
(崎山)

赤山
(今泊)

だんこ
(崎山)

デンスナー
(崎山)

夏葉
(今泊)

ましゅんく
(兼次)

加那ヨ一
(今泊)

旅や宿い
(崎山)

カマヤシナ
(崎山)

仲門へい
(今泊)

国頭岬から
(今泊)

夜起キタケ
(崎山)

汀間当(前)
(今泊)

汀間当(後)

2 3 4 5 6 7 8

This musical score consists of 17 measures, numbered 9 through 17 at the bottom. It is written in G major (one sharp) and features 16 staves of music. The notation includes various rhythmic values such as eighth and sixteenth notes, often beamed together. There are several melodic lines, some of which are connected by dashed lines across measures, indicating phrasing or specific melodic paths. The music appears to be a single melodic line with some accompaniment, possibly for a string instrument or a vocal line. The overall style is that of a traditional or contemporary piece, possibly from an Okinawan or Japanese context.

譜 2

今泊 (本調子)

1. 念 仏
2. 二舎小
3. 前田節
4. 今帰仁ぬ城
5. 福摺り
6. 九年母ん木
7. 何ガタ辺
8. テンヨー

今泊 (三下ぎ)

9. イルサスラ
10. 谷茶前
11. 加那ヨー
12. デンスナー
13. 汀間岬
14. カマヤシナ
15. だんこ
16. 国頭岬から
17. 仲門へい
18. 夏葉
19. 赤山
20. 御願節

兼次 (本調子)

1. 念 仏
2. テンヨー
3. 福摺り
4. 祝い節
5. 弥勒世
6. 新安里ゆんた
7. スリ東
8. 兼次板干瀬
9. 九年母ん木

兼次 (三下ぎ)

10. 谷茶前
11. 夏葉
12. ましゅん
13. あめ社
14. 里 が
15. サヨサー
16. 十七八節

崎山 (本調子)

1. 念 仏
2. 七月念仏
3. 何ガタ辺
4. 二舎小
5. テンヨー
6. 伊舎堂ん前
7. 福摺り
8. 夜や明きたい
9. スリ東
10. 今帰仁ぬ城
11. 海やからー
12. 蛙越いる

崎山 (三下ぎ)

13. 谷茶前
14. イルサスネ
15. カマヤシナ
16. ヨー加那ヨー
17. 兼や浜懐い
18. 名覆から
19. だんこ
20. 夏葉
21. デンスナー
22. 夜起キツク
23. 加那ヨー